
青く染まる赤い月

森本万葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青く染まる赤い月

【Nコード】

N2912T

【作者名】

森本万葉

【あらすじ】

創世の女神が大きな世界から切り離れた世界“虚空”。その虚空の青年スイは風貌から仇なす者と忌み嫌われる存在だった。

彼はある理由から魔女退治に向かった先で不思議な雰囲気を感じた少女テスに出会う。

少女との出会いを通じて彼は世界観の歪みに気づき始める。

彼はその歪みに不安を抱きながら、自分に与えられた役割を果たすために旅立つ。

この作品は魔法のいらんどで執筆中のものを転載しています。内容は魔法のいらんとのほうがかなり進んでいます。

加筆修正の後に投稿しているので内容に多少の相違があることをお詫びいたします。

彼女の憂鬱（前書き）

はじめまして。

森本万葉と申します。

処女作につき読みにくい部分も多々あるとは思いますが。先にお詫び申し上げます。

本作は魔法のいらんどで連載しているものを加筆修正して転載していきます。

従って、内容に多少の違いがあったり、投稿がそちらのサイトより遅れています。

ご容赦ください。

彼女の憂鬱

周りを取り囲む全てがあなたのためだけに創られた

↳ 仮想現実

だと知った時。

あなたは私のことを恨むでしょうね。

それでも、私は私のためにあなたにこの世界を捧げるわ。

薄れゆく意識の中で、消え行く自分の命をかけて彼女は彼女にとつての真理を世界から隠した。

たった一つの目的のためだけに創られた世界があった。

ただ、唯一の“目的”だけがその世界の真理でそれ以外は何の意味も持たない世界。

それを貫くためだけに大きな世界から切り離された空間。

その仮想現実を創り導くために彼女は生まれかわった。

そして、それを成すための不安定な素材で新たな世界が構成されていった。

はじめはそれで上手く回っていた。

全てのことが彼女の管理のもと、それらしい新世界が着々と形創られていった。

しかし、途方もない時間が創造者すら予想していなかったほど、その緻密な計算を狂わせた。

世界の意義が想定外のところで綻びを見せ始めたのだ。

その小さな歪みは、当初の目論見から大きく外れ世界は真理を無視して動きはじめた。

それを感じた彼女は決意した。

ただ唯一の目的を果たすために、世界を壊すことを。

魔女の森

「あ、くまさんだ」

幼い少女の話し声に彼は我に返った。

それは、聞こえるはずのない声。ここは子供がくるような場所ではないのだから。もし迷い込んだのなら一大事だ。

しかし、彼はその声に構っているような余裕はなかった。

「う……」

「そなたでもないのか」

敵の手は彼の首を確かに捉えていた。

そう、彼はまさに絶体絶命。そういう危機的な状況に陥っているのだ。

先ほどのやや場違いな声が幻聴ならば、彼の身はいよいよ危うい。

「やっと、会えたのにつれないね」

彼はありったけの力を振り絞って、彼の首にかけられた青白い手に掴みかかった。

「弱き者よ、反抗はお止めなさい。苦しみの時が長くなる……」

魔女は慈悲とも言えるような優しいさを含んだ声で彼に語りかけ

る。

「何故こんな力を。魔物じゃない。この力ヒトでもない……」

しかし、彼の言葉を聞いた途端に先ほどまで冷静だった女の赤い瞳が激しく揺らいだ。

「そなた、何者！」

その尊大な口振りの不気味な女は、長く伸びた青い髪を振り払うと、その手で彼の顔を覆っていた布を剥ぎ取った。

女が彼の顔を見た次の瞬間、彼は気を失った。

力の抜けた彼の体は急に重さを増したように大きな音を立てて地面に倒れこんだ。かろうじて息はあるようだが、完全に意識を失ったようだ。

青い髪の魔女は彼の傍らに膝をつく、その顎を持ち上げて顔をまじまじと覗きこんだ。

端正な顔立ちに黒髪。

「瞳も確か、漆黑」

“黒”

その色を肉体的な特徴として持つ者は人々が信仰する女神の敵であり、不吉な異端者として世間で差別されるような風潮がある。

顔を隠していたのはそれゆえかもしれない。

普通の神経の持ち主ならば、髪も他の色に染めるだろう。

「まあ良い」

魔女は彼の容姿を食い入るように観察すると、ニヤリと不敵に笑った。

そして彼の頭に触れて何やら念じた。

しかし、いくら魔女が念じても彼には何ら変化は起きなかった。

彼には魔女の呪術はきかなかったようだ。

魔女はその奇抜な色合いの顔に悔しそうな表情を浮かべて立ち上がるった。そして何を思ったか彼の足を持ち上げ背中を引きずるようにして引つ張りながら森の奥へと歩き始めた。

日頃このような作業はしないのだろう、魔女の息はかなり上がり、その表情には苦痛と疲労が色濃く滲みでている。そして、額には尋常じゃないほどの汗が流れていた。

魔女が彼を引きずったまま森の深部にさしかかったその頃、

「離しなさい」

どことなく声のようなものが辺りに響いた。
音としては恐らく非常にか細いものだった。

しかし、その声のようなものが頭の中に直接響く錯覚に目眩を覚えた魔女は眉を寄せて俯いた。
それからゆっくり顔を上げると訝しげに辺りを見回した。

バキバキバキバキ。

一瞬の沈黙の後に訪れた不快なざわめきに魔女はいよいよ顔を歪めた。

何かが近づいてくる音がする。

魔女は目を見開き耳を澄ませて森の奥をに注意をむけた。

それはかなり大きなもの。いや、それともたくさんものだろうか。

森の若い木々がなぎ倒されているような音と、ざわめき。

そこにある全ての不安を集めたような雰囲気にする至極気持ちの悪い空気の振動。

唸るような地響き。

それらが混じりあった壮絶な音が迫ってくる。

魔女はその形容しがたい雰囲気困惑しながらも状況を把握しようと全神経をこめて様子をつかがう。

やがてその音と共に、まずは巨大なクマが。

そして、森の動物たちが、虫たちがこちらに押し寄せてきた。

さらに、その後を追うように……

「光？」

それは、見えたかと思うと一瞬で森の全てを飲み込んだ。

柔らかなそれが森を覆うと辺りは、ほんのしばらく紫色に包まれ、それほどかからずにふわっと白く開けた。

そして、光は半球状に膨らむと弾け飛ぶように一瞬で消えた。

魔女の森 2

体じゅうが痛い……。

まずはその感覚が彼の意識を取り戻させた。

腫れているのだろうかやたら瞼が重い。

喉になにか支えているのか、声すら出ない。

一抹の不安の中、彼はゆっくりと軋む体を起こして目をあけた。

霞む視界を凝らして見回したその景色の中に、あの青い髪の魔女の姿はなかった。

代わりにあったのは、優しい木漏れ日と木々のざわめき。

先ほどの様子とは一変して、そこには平和な時間が流れていた。

あれは夢だったのだろうか。

彼は訝しげに首をかしげる。

「つつう」

しかし、着ていた服はボロボロ。あちこちに擦り傷・切り傷・

裂傷・打撲……。

兎に角血まみれ。

その目に写った自分の様子にそれが夢でなかったことを思い知る。

「なんなんだ」

ようやく発せられた僅かな声は風にかき消されるほど弱々しく掠れたものだった。

確かにあれは、現実だった。それなら何故助かったのだろう。

そう自問自答しても彼には何も思いつかない。

まさか、ここが天国というところだろうか。

それならばこの体の痛みはなんなのだろう。こんな仕打ちはない。地獄にしては平和で美し過ぎる。

妙によく働く頭が色々な説をとなえる。

魔女の気が変わった。納得はいかないが、それ以外に答えがなかった。

「ケホっ……」

小さな咳の音に彼は再び身構えた。

まさか……。

背筋が凍るような恐怖と、緊張感が彼の軋む体を強ばらせる。
彼はその恐怖をおして霞む目を精一杯こらし、森の平和なざわめきの中に耳を澄ませた。

「ケホっ……」

その音のする先に視線を向けると、霞む目にぼんやりと毛布を丸めたようなものがうつった。

「ケホっ、うつっ……」

それは、生き物のように小刻みに震えている。
そこには誰かが居るようだ。

あの布のようなものは着衣だろう。

それとの距離感がつかめないために大きさはわからないが、色からはあの魔女のものではないことだけが確認できた。

「ケホっ」

彼は痛む足を引きずりながら何とか近づく。そして恐る恐るそれを覗きこんだ。

「子供！」

そこには女の子が横たわっていた。

「おい！ 大丈夫か？ おい！」

彼は、女の子に呼びかけた。

一見するには目立った外傷もなく着衣も彼ほど乱れた様子もない。

何度も咳をしていたのだから、もちろん息はある。

「おい！ おい！」

彼は、女の子の頬を軽く叩きながら何度も呼び掛けた。

「おい！」

しばらくすると、女の子はつつすば目をあけて

「お腹がすいた……」

と、一言だけ言うと再び目を閉じた。

「腹へった？」

少女のその間の抜けた寝言のような呟きに彼は安心したのか、たったそれだけのことで吹き出してしまった。

気絶しているのか眠りこんでいるのか、そのあと何度声をかけても女の子の返事はなかった。

「そうだな」

彼はそう言って、少女のケープで被われた頭に優しく触れた。

そして、よっこいしょと言わんばかりにそのそばに重い腰を下ろした。

それから、手で光を遮って空を見上げた。

日差しが眩しい。

太陽はほぼ真上。

魔女と対峙していたころはまだ夜も明けていなかった。

相当長い時間彼は気を失っていたようだ。

その間、眠っていたにしては疲労感が半端じゃない。

それは、彼が危機に陥っていたことを今更ながらに思い知らせる。

しかし、この疲労感と安堵に浸っている場合ではなかった。

ここはまだあの魔女のテリトリーの森なのだ。

一刻も早く脱出しなければならぬ。

彼は意を決して腰を上げると、少女を背負って立ち上がった。

小さな少女の体は、驚くほど軽かった。

少女の背負う布製の大きな鞆には今にもはち切れそうなくらいに荷物が詰められ、その傍らにくくりつけられた彼女のものと思われる高そうな朱塗り装飾杖はいかにも重たそうに見えた。

その印象から思いつきり力んでいた彼は拍子抜けだった。

少女は軽かったが、疲れきった彼の体はひどく重かった。

それでも、力を振り絞り、足を引きずるような格好で少しずつだがフラフラと歩いた。

東へ……東へ……。

しかし、その足取りは重くなかなか前には進まない。

高く登っていた日はやがて傾き、そしてゆっくりと彼の歩みとは逆に沈んだ。

「はあ……」

半日歩いてようやく彼は見覚えのある地点に着いた。

往路でキャンプした岩場だ。

あと少しで森を抜けられる…。

安心感からか急に彼の足腰から力が抜けた。

そしてまるで崩れるように膝を折り地面に付けると、少女をその横に下ろし座りこんだ。

「ああ、せめて、せめて火を……」

彼は掠れてきた目を焚き火の跡に向けるが、どうしてもそれ以上動くことができなかった。

さらに激しい眠気が彼を襲った。

「ダメだ……」

彼の視界は疲労と眠気に閉ざされた。

迷子

「ス……」

「スイ……」

「スイ……」

「スイ……」

遠くから懐かしい声が聞こえる。

彼の名を呼ぶ甘く優しい声。

何だか、嬉しくなるような……。

暖かい気持ちになるような……。

それでもって、切なくてなぜか悲しい。

それはあの人の声によく似ていた。

視界が開けてスイが顔をあげると、法衣を纏った女性が目に映った。

「スイ」

女性は何度も彼を呼ぶものの、目の前にいる彼には全く気づいてはいなかった。

「ここだよ」

彼は不安になってその女性に掴みかかって訴えかけた。

「俺だよ」

女性の姿は確かにあの人だった。

「スイだよ」

女性は立ち止まって彼の方に向いたが、その視線はスイを見ることなくまた誰かを探し始めた。

「スイ」

自分の名を呼ぶ、知った顔の女性はそのまま歩きさってしまった。

「アンナ姉ちゃん！」

.....
.....
.....

「えっとお.....」

彼は目を覚ました。

目の前にはオレンジ色に燃える焚き火。

空は真っ暗。

傍らには、先ほど拾った少女が困惑の表情で座っていた。

「お加減は、いかがですか？」

少女は頭からすっぽり被ったベージュのケープを首あたりまで下げて彼に近づいた。

「助けて頂いて、ありがとうございます」

そして少女はペコリとお辞儀をした。

「あぁ」

スイは、ゆっくり上体を起こして少女に向き直った。

「私は、テス・スーウェンと申します。」

テスと名乗ったその少女の髪は柔らかく緩やかに波打つ白銀髪で、火の光に照らされてキラキラと輝いて見えた。

「スイだ」

異端の黒を持つスイとは対極の聖者の白の少女は彼にとって眩しい存在だった。

彼はチラッと少女の髪を見たがすぐに視線をそらせた。

生まれながら白い髪をもつ者は世間で聖者の白と呼ばれ奇跡の子として崇められている。

元は女神の容姿に由来するらしいが、王族の特異形質でもあることから高貴な色とされている。

しかも、テスという少女の口調からも庶民ではないことが伺い知れる。

王族。

貴族。

豪商……。

それらは孤児の彼には縁遠い世界の住人に間違いはなかった。

スイは出会ったばかりの幼い少女に妬ましさからくる苛立ちがこ

み上げてきた。

そしてそんなことを思う卑しい心の自分が余計に腹立たしくて、イラつく気持ちを抑えるだけでスイはいっぱいいっぱいだった。

今、何か言葉を発すれば、出会ったばかりでよく知りもしない少女を傷つけてしまいそうで、口について出そうになる相づちさえ飲み込んで彼は黙っていた。

それを知ってか知らずか、テスは彼の前に座り込んでマジマジと彼を見つめている。

その瞳は、先程の青い魔女とはまた違った魅力的な輝きを放っていた。

体の色素が薄いのか、テスの光彩の色は、血の色に近い黒か茶。もしくは紫ともとれるような珍しい色で、肌も抜けるように白い。神々しいと言えばそうかもしれないが、この焚き火の光の中ではぼんやり浮き上がるその姿は言い様のないほどに不気味な雰囲気だった。

「スイさまは、なにゆえこちらの森にいらしたのです?」

最初にこの気まずい沈黙を破ったのはやはりテスだった。

「最近、魔女が出たってきいてな」

この森は近頃、人を襲う魔女が出現した。

そのため、国王の命による討伐隊が送られた。

しかし大敗し軍隊も手出だし出来ない状態が続いていた。

それ以来、名をあげようとする命知らずの強者が次々と訪れていく。

けれど未だに魔女を倒したという報告もなければ、無事に森を出られた者も極めて少ない。

それだけ危険な森に今彼らは居た。

ゆえに、彼にとってはテスのような高貴な少女が（そのように感じられる少女が）一人でこんな物騒な森をさまよっているほうが遙かに不思議に思えた。

「その質問、そのまま返すよ」

スイは少女から目を逸らしたままぶっきらぼうに言った。

「私迷っていました」

「そうか……」

スイの顔は一瞬激しく歪んだ。

“そうか……”

じゃないだろスイ！

子供がなんでこんなところに一人なんだよ！

大人でさえも危険な森なんだぞ！

しかも！

こんな娘を一人で外に出す親もいなければ、ご近所の皆様すらそんなこと許さんぞ〜！”

ツッコミたい……”

スイは怒りを露わにしそうな顔の筋肉をプルプル震わせ、歯を噛み締めて言葉を飲み込んだ。

この娘は自分をからかっているに違いない。

スイは更に募る苛つきに身を震わせた。

【改行】 “ダメだ。ツッコんだらキャラがブレる。相手は子供だぞ。大丈夫だ。俺は冷静沈着……”

スイはゆっくり深呼吸をして心を落ち着けると、今度はテスに向かい必死に穏やかな表情を作って話しはじめた。

「迷子なら家まで送ってやろう。どこだ」

スイは冷静を装った。

「家は、私の家は……。ありません。」

“無いわけないだろ！”

スイの顔が再び少し歪んだ。

しかし、テスは何食わぬ顔で話を続ける。

「紫の嵐がすべてを壊して、私は独り……」

「もういい」

話し始めたテスをスイが遮った。

その話を聞いたスイはそれまで感じていたテスに対する妬ましさや、イラつきや不信感が一気に消えていくのを感じた。

彼女の言いかけた言葉にスイ自身が味わった言い知れない恐怖と絶望を思い出させた。

そして、テスが彷徨える経緯もなんとなく分かったような、そんな気持ちになった。

スイはそれ以上の詮索を止めた。

幼い少女が壮絶な体験をして酷く傷付いたことを思うと心が痛かった。

「すまない、聖者の白にも人らしい過去があるんだな」

「聖者の白？」

「髪だよ。女神とお揃いだな。世界から祝福されているんだな」

テスは自分の銀色に輝く髪をつまんでみた。

「おばあちゃんみたいで恥ずかしいです。私にはあなたの夜空のように深い色がとても素敵に見えます」

恥ずかしげもなくニツコリと微笑んだ少女に、スイのほうが照れてしまった。

「それで、聖者の白というのはなんですか？」

“ 知らんのか！ ”

不機嫌な時間

魔女との対戦から、2日後……。

スイ達は未だに森をさまよっていた。

往路で通った道は倒れた樹木で塞がれて、さらに前夜の大雨でぬかるんだ地面が沼となり彼らの行く手を阻んでいた。

「この季節に大雨なんてスイ様はあまり運がよろしくないのかしら」

テスがボソツともらした。

独り言を盗み聞きするのもばつが悪いが、加えて思い当たるふしが有るだけに言い返す言葉もなかった。

「はあ……」

テスがもらした何気ない溜め息が、彼の心をチクチクと刺す。

思い返すと彼は本当についていない。

たいがい彼が何かしら行動しようとする天候には恵まれず、こぞという時には体調を崩し、好きになった女性はみな彼の親友を好きになる。

今まで大した病気や怪我もなく生きてこられたのが奇跡かもしれないと思うほどに、彼は運がなかった。

そもそも、捨てられたか死別かは定かでないが両親の顔もしらない。

しかも、彼が孤児として引き取られた施設は大災害に遭い、被害がひどかったため運営が出来なくなった。

幸いにも行き場失った子供たちは殆どが養子、里子、就職、独立、結婚などなど。

そう時間をかけずに進路が決まったのだから、スイ独りだけ本当に行き場が見つからなかった。

最後の項については、彼が髪も目も黒い異端の黒ゆえだろうか……。

「ああ……」

思い出すだけで泣けてくる。

ネガティブな気分になると、自分の容姿が不吉というのがただの迷信ではないのではないかと更に不安を煽る。

スイがそんなことに気をとられながら早足で歩いたため当然ながら歩幅の小さいテスとの距離は徐々に広がっていった。

しばらくするとテスはほつぺたをぶくつと膨らませて……

「スイ様！ 私は疲れました。もう歩けません」

と座り込んだ。

スイの頬の筋肉はピクつと不機嫌そうに引きつった。

ただでさえ疲れているのに子供の戯言など聞きたくない。

しかし見たところテスは10歳いくかいかないかの幼い子供。

ここ2日、ろくに休みなしに歩き続けたうえ、まともに食べていない。

ここまで歩いただけでもこのくらいの子供にすれば、かなり頑張ったほうだ。

「お嬢様にこんな旅は辛いよなあ」

泣き言を言うテスに苛ついたが、よく考えれば仕方ないことだった。

スイは思い直し遙か後方のテスを迎えに行くことにした。

「スイ様。ありがとうございます」

テスは俯いた。

見たところ、本当に疲れているようだ。

かわいそうなことをした……。スイは心の中で謝罪した。

疲労からあまり考えが及ばなかったとはいえ、完全に自分のペースで歩みを進めていた。

おそらくテスはずっと小走りだったのだろう。

「負ぶってやるからまってる」

彼がそう言いながら歩いていくと、テスは急に立ち上がった。

「ぎゃ〜！ 死ね」

聞いたこともないようなテスの叫びと悪態のあと……。

ズバツつと何やら凄まじい衝撃が通り抜けた。

爆風に顔を背けたスイが慌ててテスの居た方向を見ると……。

「あ……。」

スイはあまりの出来事に言葉を失った。

「あ……。失敗してしまいました」

テスは困った顔をして口元を手で覆った。

テスの左側の茂みが東側に向かってぱっくりと開けている。

「なっ……。」

スイはあまりの驚きに硬直したまま動けなくなっていた。

「私の靴を虫けらが足蹴にしましたの」

テスはやや怒ったような口振りで話しながら衣類についた土を払った。

“何なんだ……。マジ何なんだ……。本当に何なんだよ！”

テスが冷静なのがスイには信じられなかった。

信じられないが、その信じられないことが今、目の前に広がっている。

何度も考えて、必死に頭を整理して出てくる答えすらまた信じがたいものだった。

「まさか……」

スイが恐る恐る尋ねようとすると、

「道、出来ましたね」

テスは素知らぬ顔でそれを遮り切り返した。

「私、みたくもいろいろ出来るんですよ」

テスは満面の笑みでそう言うとスイに駆け寄った。

「負ぶってくださいるって仰いましたよね」

スイは言われるがままにテスを背負うと、テスを作ったと思われる道を歩き始めた。

道は、無理やり木々を粉碎したり燃やしたりしたわけではなく、何やら木々を自らよけさせたような不思議な作りになっていた。

空間をこじ開けたようなその隙間は真っ直ぐに森の境まで伸びていた。

スイは、まるで狐につままれたような気持ちのまま、テスを背負って出口に向かって歩き続けた。

森が途切れる境目が近づくとつれて、

“ 何かが……。何かが”

「おかしい……」

呆気にとられて言いなりになっていたスイだがようやく我に返った。

結構な時間がかかったのは、スイが鈍いからではなく、よほど信じがたい出来事ゆえのことだ。

“俺、本当にしつかりしろよ”

スイはテスを背負った背中を伸ばし、支えていた手を外した。

「きゃっ！ な、何をなさるの」

急に支えを失ったテスは長身のスイの背中から落ちて尻餅をついた。

スイはテスに向かいしゃがんだ。

そして、痛がる少女の目をしっかりと見据えて睨んだ。

「テス！」

しかし、そんなスイの姿勢を見てテスは吹き出した。

でっかい大人の男が大股開き尻を落としてしゃがむ姿は実に滑稽で、

スイの真面目な顔すらテスの笑いの種にしかならなかった。

「うふふふ……。どうなさいました？おかしな格好して。ふふふ……」

「笑うな！」

自分がいかに滑稽な体勢で少女と対峙しているかを知らないスイは、テスの態度に一喝した。

テスはひとつ咳払いをするとスイの目を見据えた。

「お前、何なんだ。さっきのあれは何だ」

しかしテスはきょとんとしている。
その表情は

“スイ様は一体なにを言ってるの？ 何のこと？私がかした？”

と言いたそうな雰囲気だった。

恐らくスイにとっての非日常は、テスにとってはごく当たり前の

ことでだったのか状況がのみこめならしい。

その態度にスイはまた怒りが込み上げてきた。

スイの眉間に深く刻まれた不機嫌なシワを見たテスは、叱られているらしいことを察したテスは考えた。

“ どうしてかしら……まさか…… ”

テスは困ったような表情でスイの目をチラリと見ると何かを話し始めようとした。

しかし、もう一度思い直して目をそらし考えこんだ。

“ ちがうわ……。背負っていたただたのは、スイ様の善意で申し出て下さったからですもの ”

スイのイライラは徐々に募る。

テスは何度も何かを思いついたかのように顔をあげるが、次の瞬間には何か別のことを思い出して眉間にシワを寄せて真剣に考え始めた。

スイの怒りはそろそろ限界だった。

ただでさえ悪い目付きが眉間の皺に彩られて、彼の人相を極悪人のように歪めていく。

テスのその真剣な表情にスイは違和感を感じずにはいられなかった。

“当たり前におかしいだろ”

スイは怒りを必死に抑えテスの返答を待った。

しばらくして

「あの……、申し訳ありませんが、私にはスイ様のお怒りの所以がわかりかねます。何故、そのように険しいお顔をなさいますの？」

テスは本当に申し訳なさそうに上目遣いでスイを見上げながら尋ねた。

その言葉を聞いたスイはとうとうキレた。

「この道だ！ お前が作ったのか！ ならばどうやった。」

スイは、イライラした口調で早口にたたみかけた。

テスはその時初めて何が悪かったのかを悟ったかのように青ざめた。

そして、もっていた装飾杖を投げつけると出口に向かって走りだした。高価そうな杖が地面に叩きつけられるのを放っておけなかったスイは、落ちる寸前でキャッチ。

しかし、その直後スイは自分の貧乏性をほとほと恨んだ。

「いでで……」

テスと一緒に持ち上げた時にはあんなに軽かった杖が、今は鉛のように重かった。

スイは右腕の指を骨折した。

利き腕ではないのが幸いだった。

利き腕が無事だった、などという幸運に胸をなで下ろしている暇などなかった。

テスは出口に向かって駆けていく。

「おいテス！」

呼び止めたスイの声のあとに何やら低い地響きのような音が続いた。

スイが来た方向を振り返ると……。

スイの目の前にはまた信じがたい光景が広がっていた。

「え……」

慌てて杖を放そうにも重くて全く動かない。

「スイ様！ 何なさっているの。早く森が閉じます！」

テスが逃げ出したのは自分のしたこと重大さや異常さに気づいたからではなかった。直面している危機を察したからだった。

スイはありったけの力を振り絞って、杖に挟まれた手を引き抜くと、テスの待つ出口の方向に全力で走った。

森はテスの杖をはじき飛ばし、迫ってくる。

テスは意を決して、スイのほうに走りよると、上空にて旋回する杖をキャッチした。

杖を手にとったテスはスイの背に自分の背をむけるようにして構えた。

「止まれ！」

テスの甲高い声が森の立てる不気味な音をかき消すかのように響いた。

押し寄せる地響きのような爆音は、ミシミシと軋むような嫌な空気に変わった。

「走れ！」

振り向きながら叫ぶテスの横顔に、子供らしい幼さはなかった。

その凜とした表情には似合わない小さな体がゆっくりと確実に後退している。森に押されているのだ。

森の質量はどんなに小さく見積もってもテスの数千倍。大きさや重さはそのままそれが持つ力を示す。

どんな計算をしてもテスの力では、到底かなわない。

森はその圧倒的な力で小さな少女の体を押し潰そうと容赦なく押し寄せる。

「急いで！」

その緊迫した様子にスイは圧倒され、テスの言うがまま走りだした。

テスの体は森の勢いに押されてジリジリと後退していく。

「きゃっ！」

スイが森を出た直後、テスは森にはじき飛ばされた。先ほどの杖同様、舞い上がった少女の体はまるで羽のように軽々と飛んでいく。

そして、弧を描くように落下！

軽やかな音を立てて落ちたその先ではスイが両腕を広げて待ち構えていた。

「スイ様、素敵なお迎えですね。ありがとうございます」

スイは、しっかりとテスを受け止めた。

「はぁ……。」

不機嫌な時間（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。

ここまでは謎だらけ。少しずつですが解けてくるはずですよ。

ただし序盤は暫く謎の羅列なので頭が混乱するかもしれません。
すみません。

テスの発言に気をつけていくと分かりやすいかもしれません。

懐かしい聖堂の町

森の辺を歩く2人の足取りは重かった。

「はあ………」

テスは、疲れておしゃべりをするような余裕もなく項垂れている。一方、それを背負って歩くスイの方はシヨックを受けてひどく落ち込んでいた。

彼としては冷静なキャラクターで居続けたかった。

そして、せめて女性や子供といった弱者は守れる存在でいたかった。

それなのに、彼はテスにあんな醜態を曝してしまった。

自分でも信じられなかった。

相手がそのように指示したとはいえ、幼い少女を盾に逃げるだなんて。自分が情けなくて仕方がなかった。

「はあ………」

彼のため息にテスも心が痛んだ。

「仕方ありません。スイ様は弱い………」

落ち込むスイを慰めようと発したテスの声は小さくかすれていた。しかし確かに彼の耳に届いた。か細い声で優しく発せられたはずのその言葉がが鋭く彼の耳を刺す。

その言葉に彼は更に傷ついた。

それは紛れもない真実だった。

勇んで魔女討伐に来たスイ。彼は弱いのだ。

弱い……。

それはスイにとって幼いころからのコンプレックスだった。

戦いのセンスがないとか力がないとかではない。剣の型は美しい。

演習で剣術を披露すれば誰もが筋は良いとほめる。

柔軟性も、体力も、腕力も、測定すれば人より優れている。

測定器が壊れているわけでもなく。器具で図れば誰より優れている。

それにも関わらず、どんな努力を重ねても、どんなに戦術を練っても、どんなことをしてもスイは弱かった。

見るものが目を疑うほどに、美しく剣を操るその才能が全く役に立たない。

そんな姿は、笑いの的だった。

スイの覚悟が足りないわけではない。

自分は弱いと自覚のあるぶん、たとえ演習だったとしても戦いと名の付くものにおいては誰より必死だった。

ただ、人や動物を前にすると体からすり抜けるように込めた力が逃げいく。戦ったり、壊したり、傷付けたりといった行為が出来ない。

そんな感じだった。

それをまだ出会って日も浅い少女に見透かされたのが恥ずかしく悔しかった。

これまで彼が得意分野で力を発揮するような機会がなかった。そんなこともあってテスはスイが弱いという印象を持ってしまったに違いない。

しかし、彼がどのように思われようが、彼が活躍するような場面はないほうが好ましい。

思い返してみると、この辺りで彼が活躍した試しはない。

凶悪な魔女が住み着く物騒な森なのに。

ここ数年この森の周辺には、彼の能力を必要とするような脅威はなかった。

スイが幼い頃から住んでいたこの森の近くの施設でも、彼は自分の能力を使う機会に恵まれなかった。

その特別な力に気づきながらも、使う場面に直面しなかった。

そのために、その力が当たり前にみんなが持つ力と捉えていた。

故に彼はヒドいコンプレックスを抱える羽目になったのだが……。

「スイしゃま……、私眠らくなって……」

先ほどからスイの背中であぐらをしていたテスがムニヤムニヤと口が回らない様子で話しかけてきた。

「寝てる」

「ふぁーい……」

子供というのは眠ると重くなる。

力の抜けたテスの体も例外なく軽いながら少しだけ重さを増した。スイは、テスを背負って黙って森と平原の境を歩いた。

平地から吹きつける風が時折彼の暗く沈んだ横顔を撫でていく。

まるで彼を慰めるかのように……。

けれどスイはどうしても自分が許せなかった。疲れきって眠る

テスを背負って歩くのがせめてもの罪滅ぼし。

そう信じてスイは、ぐったりと力なく自分にもたれ掛かる少女を背負い歩いた。

あぜ道は歩みを進めるにつれて均された道になっていく。人や車を通っている証拠だ。町が近い。

“早く休ませてやらないと”

スイは少しだけ歩く速度をあげて先を急いだ。

この森の辺にはひとつだけ町があった。

そこには、かつてスイが暮らしていた施設があった。
その町のシンボルは、さびれた田舎町には似つかわしくないほど
壮麗で大きな聖堂。

テスを負ぶったスイの目に、その聖堂の鐘が掲げられた高い塔が
見えてきた。

町を囲む塀から、ヒョコツと飛び出たよう見えるその塔は白く輝
いてみえる。

空の色に映えるその塔をみるのがスイは幼い頃から大好きだった。
今日もそんな美しい姿をたたえた塔が太陽の光を反射して真っ青
な空にくつきりと白く浮かび上がる。

その塔を目にしたスイは安心感から胸をなで下ろす。
そして懐かしさから足取りが軽くなった。

「スイ！」

町の門を管理している兵士の声が響く。

どれだけ目が良いのだろう。そして、どれだけ声がデカいのか。
そういった特技が認められて警備兵になったのだろうが、信じら
れないくらい驚異的な能力だ。

スイが門に近づくとつれて、兵士の顔が見えてきた。

“誰だ……”

せつかくの出迎えにも関わらず、スイは大した反応もせず歩く。
人の顔を覚えるのが極端に苦手なスイには、出迎えてくれた兵士
に全く見覚えがなかった。

スイはもう一度目を細めて注意深くみる。

「スイ、なんだ無事だったのか！」

やはり、記憶にない。声すら覚えがない。

それにも関わらず、兵士はズいぶんと馴れ馴れしい。

“やはり知り合いか？”

スイは再度目を凝らして塀の上の兵士を見るがどう見ても知り合
いには思えなかった。

スイは訝しげに首を傾げながら、門の前で立ち止まった。

間もなくギリギリという金属音が鳴り響き、町の玄関口である門
がゆっくりと開かれた。

ただし、大きな荷車用の門ではなく、人が通るために作られた脇
の小さな門のほうだ。

しかし、鍵や周りの仕掛けの都合だろうか、やたらと大きな音が
する。

“うるさいなあ。テスが起きる”

けれどそんなスイの心配などなんのその、テスはスイの背中に身
を寄せて気持ちよさそうな寝息をたてている。

スイは開かれた門の中に入ると、近くの衛兵に手を挙げ他に通行人がいないことを知らせる合図し門を閉めさせた。

衛兵はスイに敬礼してから門を閉めるように開閉係に指示した。再び門はギリギリという騒音をたててゆっくりと閉まった。

門が閉まるのを確認すると、スイは暗い町の塀を抜けて歩きだした。

「おい、無視すんなよ。オイ！」

その背後から先程の兵士が大声をあげながら追いかけてきた。

“ だから、ああ………… ”

テスが起きないかと心配しながらもスイは足を止めて振り向いた。

「お前、無事だったんだな。魔女を目の前にして逃げてきたのか？まさか倒した？なんてことはないよな」

兵士は親しげな笑顔を浮かべているが、その顔に見覚えのないスイにとってその兵士は不審者でしかかった。

「お前、何て顔してるんだよ。疲れきった顔だなあ」

あまりにも馴れ馴れしい兵士の態度。
そんなに仲の良い友達だったのならば忘れるわけがない。
スイは記憶を辿るが、この兵士に該当する顔はスイの頭にはなかつた。

「お前、誰？」

スイはだんだん気持ち悪くなってきた。

スイの言葉に、兵士の顔が一瞬曇った。
自分は友達だと思っていたのだらう。

兵士はちよつとショックを受けたようなその表情を強ばらせて話し続ける。

「あの親衛隊の！ ほら試験キャンプで一緒だったじゃないか」

兵士はちよつとムキになったように声を荒げて話す。

スイはもう一度記憶を掘り返す。

そして……

「ああ！」

つと顔をあげたがすぐに真顔に戻って。

「すまん、忘れた」

と言って兵士の肩をポンと叩いた。

兵士はガツクリと肩をおとした。

キャンプでどんなやり取りがあったのかは、わからないがこの兵士にとってスイの印象はそうとう良かったのだろう。きっと友人になれて喜んだのだろう。

「もう良いよ。思い出したらまた声かけてくれ。俺この配属だから」

兵士は諦めたように俯いた。

「ああ」

スイは、面倒くさそうに返事をすると振り返りもせず先に急いだ。

スイに背負われたのテスは相変わらず、ぐっすり眠っている。

あんなに騒がしくても全く動じずに眠り続けるこの睡眠根性はなかなかのものだ。

そうでなければ、スイの背中がよほど安心できて気持ち良かったのだろう。

「王宮近衛兵試験か」

つい一年ほど前のことだがとても懐かしい響きだった。

スイは何時まで決まらない自分の進路に苛立ち、志願兵として勤めていたことがあった。

志願兵は身元を証明する書類と筆記試験と、簡単な体力測定だけで誰でもなれる職業だった。

そのためスイが異端の黒であるのが戦闘能力が低かろうが常識と基礎体力さえあれば簡単になれる。

その時にステップアップの為に、王宮近衛兵の試験も受けたのだ。しかし、志願兵と異なり書類審査や筆記試験だけでなく、実技強化キャンプや格闘試験がふんだんに取り入れられた選考メニューに人より戦闘能力的に劣るスイは見事に一時審査で落ちた。

苦い思い出だった。

さっきの兵士も門番をしていたということは落ちたのだろう。

気の毒に。

スイが覚えていれば、今夜は沈んだ気持ちを払拭するためにも、お互いの落選話で酒でも飲みながら、笑い合いたかったのだろう。

しかし、それはスイの性格上、難しい相談だった。

スイは人見知り傾向が強いのだ。

もっと正確に言えばスイは人付き合いが苦手だった。

人の顔や名前を覚えるのが苦手なものも一因ではあるが、何よりも自分の容姿による謂れのない差別や偏見から、故郷の人々が自分の周りに寄りつかなかったことが一番大きな原因だった。

今も、彼が道を歩けば信心深いご老人たちは話を止めて目を合わ

すまいと背を向ける。

異端差別者の両親に育てられた子供たちはスイに石を投げってくる。幼い頃はそれはそれは傷ついた。

会ったことのない両親を恨んだ。

黒い髪が嫌でめちやくちやにハサミで切ったりもした。

今はあまり気にならなくなったが、それでも凹むこともある。

この町に来ると、そういつたことをいろいろと思い出す。

この町が国内においても異端の黒に対する差別が格段に激しい地区ゆえかもしれない。

それでも、スイにとってここは紛れもなく懐かしい故郷だった。

彼はテスを背負ったまま真つ直ぐある場所へと向かっていた。

それは、町のシンボルであるあの白い塔のある大聖堂。

そこはスイの拠点でもあった。

しかしそこは、スイにとって居づらい場所でもあった。

聖堂は創世神たる女神を讃え敬い、女神に祈る場所。

迷信とはいえ、崇拜する女神に仇なす存在とされる容姿をしたス

イは聖職者たちから疎ましく思われていた。

表面上聖職者らしく美しく丁寧に言葉を取り繕われても、あから

さまな態度は子供のスイにも不快だった。

それでも、スイは幼少期を過ごした施設が廃業してしばらくは、

この針のむしるに居座った。

ほかに行く宛がないことは良くわかっていて。自分のような容

姿のものを受け入れてくれる場所があるだけでも有り難いことだと

幼いながらにわかっていて。

けれどそんなところでも彼は孤独だったわけではない。

迷信や偏見にとらわれずに自分を受け入れてくれる人もいた。

数人だが友達もいた。そんな人の存在が、彼のこの町に対する

気持ちの僅かながら温かいものにしていて。

そしてその温かな思い出がこの町を故郷のように感じさせていた。

聖堂の入り口は町の中心部にあった。

聖堂前には大きな広場があり、露店がちらほらと立っている。

休日には旅の芸人などがここへ来てパフォーマンスすることもあ
る。

この日も、広場は町の人々の憩いの場として賑わっていた。

スイがその広場に差し掛かったとき、時を告げる聖堂の鐘が高ら
かに響きわたった。もうすぐ昼だ。

その音でやっと目を覚ましたテスがスイの背中でもぞもぞし始め
た。

「うーん……。もう朝ですか？」

スイはテスを背中から下ろした。

子供というのは眠ると汗をかくのか、テスの額には点々と見える
ほど汗の粒が浮かんでいた。

そういえば、スイの背中も何だか湿っぽい。

スイはテスの額を拭ってやった。

「お腹すきました。たまにはお肉の入ったスープが飲みたいです」

「お前は。起きるなりそれか。贅沢言っな」

スイはそう言い放つと聖堂に向かい再び歩きだした。

「ああ！ 待ってください」

テスはその後ろをヒョコヒョコと小走りですいて行く。

聖堂の前についたスイは一度深呼吸をした。

「帰れば、お偉い聖職者様にまた嫌味の一つも言われるだろう。」

しかし、このドアの前に立つと、そんな小さなことを気にするよりも、もっと、何だか身が引き締まるような緊張感が全身を振るわせる。

これが聖域の神聖な雰囲気とやらの成せる技だろうか。

スイは恐る恐るドアを押しした。

聖堂はまず入ると、小さな控えの間があり、その奥には礼拝堂が広がっている。

神聖な雰囲気には圧倒されたりもするスイだが、あまり信心深くはなく礼拝堂はいつもスルー！。

スイが顔をだしても礼拝者たちに嫌な顔をされるだけだ。

その上、お説教好きな僧侶が当番の日に間違っただけ顔を出さずともなら、長々と難しい話を聞かされる。たまったもんじゃない。

スイは迷いもせずに横手にある回廊にまわる。

礼拝堂の脇には手入れの行き届いた庭園や、修道士たちの宿舎、孤児や病人の一時預かり所、食堂、ホールなど他にもいろいろな設備があり、それらは回廊で繋がっている。

本当に田舎には似合わない聖堂でまるで大きな複合施設のような造りになっていた。

スイは、礼拝堂のすぐ隣の建物の中にある執務室のドアを叩いた。

ドアには

《クリス》

と彫られた表札のようなものが下げられている。

トントン

ガチャガチャ

ドンっ

スイはノックするとほぼ同時にドアをあけた。

「うわぁ！」

ドアの正面に居た法衣の男性は、驚いて声をあげた。

スイは、構わず中に入った。

「なんです！ スイですか。驚かせないでくださいよ。ノックしてもそれでは意味がありませんね。いつも注意しているのに……。直らないものですね」

男性はゆっくりと手に持っていた聖典を机上に置いてからスイに向き直った。

年の頃は30中くらい。青白い顔をして体つきも痩せているので健康そうには見えないが、優しそうな表情と青い瞳が印象的だった。

「お帰りなさい」

男性はそう言うところれぞ聖職者つというような温かな笑みを浮かべた。

「ただいま、クリス兄ちゃん」

スイは少し照れながら答えた。

男性の名前はクリストファー。

スイにとっては兄のような存在の人物。

クリスはスイが幼い頃に世話になった施設の管理をしていた人の息子だった。

また行き場を失った孤児たちをこの聖堂で保護して世話するよう進言した人物だ。

そして、スイが心を許せる数少ない人物の一人で、その中でも最も信頼している人だった。

「あのさ……。これ、保護してくれ。親はすぐ見つかると思うから」

スイはテスをグイツとクリスの正面に押し出した。

テスはキョトンとしていたが、すぐにケープを脱いで、ペコリと丁寧にお辞儀をした。

迷子をどうにか……。そう考えた時、スイにはここに預ける以外

に何も思いつかなかった。

テスのような娘が迷子だと言って回れば、高貴な聖者の親として利益を得るために偽両親がわんさかやって来るのは目に見えていた。人見知りで人付き合いが苦手でコミュニケーション能力の劣るスイにはそれを見抜く目がないことくらいは明らか。本人もそれは十分に承知していた。

それならば他でもない信頼出来るクリスに任せるのが一番と、そう判断したからだ。

クリスの人柄は子供から好かれるというのも適任者としては申しぶんなかった。

「じゃ、よろしく」

スイはそう言うのとクルツと踵を返して後ろを向き、そそくさと部屋を出ようとした。

「スイ！」

「スイさま！」

スイは面倒くさそうに振り向いた。

しかし、困った顔をして髪の毛をクシャクシャにすると再び扉に手をかけた。

出来れば聖堂には長居したくない。

「待ちなさい」

“そつだよなあ。でも、待たない！”

スイは扉を開けるとダッシュで逃げ出した。

「僧兵の皆さん！スイを捕らえて下さい」

クリスの声に聖堂の中の修行僧たちがわらわらと出て来てスイをあつというまに捕らえた。

僧侶たちに拘束されてクリスの前に引っ立てられたスイはうなだれた。

「こちらのお嬢さんのこともあります。今日はこちらで床を用意しますから、事情を説明なさい」

クリスはそう言うとおの温かいが含みのある聖職者の笑みを浮かべた。この人には敵わない。

スイはまたそのことを思い知らされた。

その夜、スイはクリスの怒涛の質問攻めにあっていた。

スイが前回聖堂に寄ってから、今までどこで何をしてきたのか。今は主に何をしているのか。

テストはどうやって知り合ったのかなど……。

その質問の多さとしつこさはまるで犯罪者を事情聴取するような勢いだった。

しかし、その口調には家族を労り心配するような温かさがあった。もつと逐一事情を説明しておけばこんな心配させずに済んだものを。殆ど連絡もせずに関わりつらさと聖堂に寄ってクリスの顔をチラッと見たら話もせず逃げ帰っていたスイが悪い。そんなことは重々承知だが、すっかり聖職者が板に付いたクリスと話すのはスイにとって実に面倒くさいことだった。有りがちだが、聖職者という職種の間は話が小難しく長いのだ。

話が一段落するころにはスイはげんなり。

「しかし、疲れたでしょう。今日は休みなさい。猥下はもうお休みですから、明日の礼拝のあとにご挨拶なさい」

スイはドキッとした。

猥下とはこの聖堂で一番の権力者。枢機卿である。

「あのじじい、まだ生きてたか」

偉くなるにはそれなりの理由がある。アクドイ人物なのだ。加えて聖堂の聖職者の中でも特にひどい異端人種差別者としても有名だった。

スイが最も苦手とする人物。出来れば避けたい人物。

本当にできるなら残り人生はなるべく関わらずに生きていきたい。

「コラ、と言いたいところだが気持ちはわかる。まあ、そんなに毛嫌いするな」

温厚で人に対していつも公平なクリスすら半笑いである。

「わかった。明日な」

スイはそういつと部屋を出た。

「さて、テスさんとおっしゃったかな？」

スイが部屋をでるとクリスの口調が変わった。

「はい」

一人部屋に残されたテスはただ答える。

「聖者の白、ですか」

テスを探るように見るクリスの表情は硬い。

「尋ねたいことがあります。小さな体に夜更かしはツライと思いま

すが、もつじばらくお付き合して下さいね」

クリスはそう言つと冷や汗を拭つた。

女神の従者

「よつと……」

真夜中、町中が深い眠りに落ちてあたりが静まり返った頃。

スイは一人起きて床を抜け出した。

クリスに会って十分過ぎるくらいに近況を報告できた。テスも預けた。クリスならばきつとテスの両親を見つけてくれるだろう。もし見つからなかったとしても、それなりの待遇で迎え入れてくれるところを選んでくれるだろう。

そうとなれば、今のところこの聖堂には用などなかった。

「あのクソじじいの説教なんか真面目に聞けるかよ」

スイはブツブツ言いながら先ずは鞆そして靴、そのあとに武器といった手順で次々に荷物を聖堂の塀の外に投げると、最後は自分が塀をよじ登った。

塀を乗り越え難なく脱走に成功したスイは、得意げに口角をつり上げて鼻先で笑った。

「昔取ったなんたら……だ」

その昔、規律に厳しい聖堂での暮らしに飽き飽きしていた幼いスイはよくこうやって抜け出していた。

そんなことも今となっては良い思い出。

スイは荷物を一つ一つ拾い上げていつものポジションへ装備した。そして、最後に頭からストールを被ると足早に門へと向かった。スイがちょうど聖堂の塀をよじ登っていた頃、テスもまた脱走しようとしていた。

「こんな所には居られません」

スイが自分を置き去りにしていくつもりだと知ったテスは慌てていた。そして、何も考えずに部屋の外へと出るために玄関口に向かった。

「テスさん」

ちょうど外に出ようと扉に向かい合った時、後ろから呼び止める声にテスは振り返った。

「クリスさん！」

脱走現場を見られたテスは身構えた。

しかし、クリスはそんなことは全く気にしていない様子だった。まるでテスが逃げ出すことは計算済みだったように落ち着いている。

「スイも今夜のうちに出ていくでしょう。一緒に行くのですか？」

クリスの口から発せられた予想外の言葉に驚きながらもテスは二ヤリと不敵な笑みを浮かべた。

「あら……。それは想定外でしたけれど好都合ですね。今晚は外で待つつもりでしたから」

テスの目は、およそ子供がする目とは思えないほどの鋭い眼光を放っている。

月光を紡いだような涼やかな彩りを放つ少女の髪が、蠟燭の灯りを受けて極彩色の影を落とす。

そのただならぬ雰囲気にはクリスは息をのむ。

「テスさん、何の力もないスイはただの人間ですよ」

クリスは訝しげにテスの表情を覗き込む。

一方のテスは真っ直ぐな視線でクリスの目を見据えて……

「わかっていますよ。ですから、私が必ず守ります」

そうハッキリした口調で答えた。

「その言葉信じて良いのですね？」

クリスは何だか上手く説明できないけれど確かな違和感を感じていた。

それは、テスが聖者の白で、スイが異端の黒だから……。そういう意味ではなく、どちらかと言えばそれとは真逆。

テスの存在が不吉に思えて仕方がなかった。

「この揺るぎなき命にかえても」

テスのその真っ直ぐな視線に、クリスはそれ以上何も聞けなかった。

テスは朱塗りの杖を扉にかざした。

扉はまるで森が急に開けた時のように不気味な振動と音を立てて歪み、中にポツカリと抜け道を作った。

「私の使命ですから。お約束いたします」

テスはそう言い残すと扉に空いた隙間から外にでた。

テスが去ると扉の歪みは消えて、何もなかったかのように元の状態に戻った。

「魔物なのか……」

一方、スイは静かな夜の闇に紛れて門を目指していた。

いつものように顔や頭を隠して夜の町を歩く姿は、誰がみても不審者にしか見えない。

門までは何とか辿り着いたが、やはり門衛に止められた。

「通行証だせ。それと深夜だから聖堂か役所の通行許可書もだ」

門衛は疑いの目でスイを見る。

無理もない。その出で立ちには誰がどう見ても怪しい。

頭巾を脱げば良いというわけではない。スイの黒い容姿を見れば余計に疑われる恐れがある。

異端の黒は忌み嫌われていることもあり、まともな職に就けず悪行に走るといった傾向があるため、迷信以外にもあまり評判が良くない。

知り合いでも居れば難なく通れただろうが……

“昼間のやつに名前くらい聞いとくんだった”

後悔先にたたず。

スイは通行証を鞆から出して門衛に提示する。許可書はない。

その時……

「スイ様？」

つとテスがひよっこりと顔を出した。

門衛は、スイの通行証とテスの白銀の髪をみると急に態度を変えて敬礼した。

それから慌て門を開けるように指示をだすと、今度は恭しく直角に腰を折った。

「大変失礼致しました」

門衛はスイに通行証を返した。

その通行証には聖堂の燻し銀のものとは違う、金と青の装飾がついたエンブレムが。

「王家の方とは知らずに無礼の数々……」

聖者の白が王家の特異形質であることは国民なら誰もが知っていた。

テスの姿をみて、勘違いしたのでらう。

兵士たちは皆、恐縮し震えてさえている。

そんなこんなで、プリンセスに間違われたテスは丁重に見送られてスイと共に門を出た。

門を通過出来たのは好都合だったが、テスまでついて来たのは明らかかな誤算だった。

そして、もう一つ。

「なぜ抜けてきた」

「私が居て良かったでしょう?」

テスは淡々と答えた。

確かにそうだが、姫君だと身分を偽って行動したのがバレると非常にまずい。

向こうが勝手に勘違いしたとは言っても、それに同調したならばこちらも言い逃れは出来ないだろう。

スイは頭を抱えた。

そして、少々乱暴に少女の銀髪に上着についたフードを被せた。

「隠しとけ!」

スイは歩きながら考えこんでいた。

こんな面倒なことになるなら、夜中に逃走しないで昼間のうちになんとか抜け出すべきだった。

王族だと偽って行動するのは重罪だ。しかも、テスのような娘を異端者である自分が連れ歩けば誘拐も疑われかねない。

いくら真面目に仕事をこなしても、人に親切に誠実に暮らしても、こんな容姿をしているが故に信用の薄い身の上。これ以上ならず者扱いされるのはごめんだった。

「あ！」

そして、散々考えた末に何かを思いついた。

“どうせ行くつもりだったんだ、あそこならテスを預けられる。もし、この件がバレてもテスさえ引き渡して……”

スイは顔を上げて、頭巾をとった。

「よし、行くぞ。」

そして両手で自分の頬を数発叩いて気合いをいれた。

仮眠はほんの数時間しかしていなかったが、頭は冴えていた。

「行きましょう」

テスはなんだか晴れ晴れしたスイの表情に安心した。

彼らは再び東に向かって歩きだした。

夜はまだ明けない。

月のない夜の闇は果てしなく深い。それは道なき道をゆく旅人には不安なものだった。

だがしかし、スイは動じない。むしろ清々しい気分だった。

新月の日はどんな夜よりも穏やかな夜になることを彼は知っていた。

夜行性の動物も魔物もこの日は巢に籠もって出て来ないのだ。その代わりに夜空に不思議な音が鳴り響くことがあった。それはキーンと闇に溶けるような音。

今日も遠くから微かに聞こえてくる。

誰もその正体を見たことはなかったが、何かしら恐ろしいものが存在しているのだろうという漠然とした恐怖感が世間に浸透していた。

それも仕方がないことだ、人というのは異質なものや得体の知れないものを忌み嫌う。

しかし、スイはそういう考え方は好きではなかった。

けれど、その話もありがちで的外れな噂ともいうわけでもない。

危険を察知する能力に優れた、夜行性の野生動物たちが新月だけは行動しないのだから。

それでもスイはそんな新月の夜も闇に溶ける音も好きだった。

理由らしい理由は特になかった。

ただ、何となく心地よかった。ただそれだけ。

「月の竜が鳴いていますね」

テスもその微かな音にうつとりした様子で聞き入っていた。

「月の竜？」

聖堂での生活が長く迷信やら言い伝えやら民話やら……。そういった類の話に詳しいスイにも初めて聞くものだった。

「この世界を創った魔王がまだ人間だった時に生み出した魔物です」

テスの話はやはり初耳だった。

創世神話では世界を創ったのは神で、この世界――虚空を大きな災いから守るために隔離したのが女神。

神話の中に登場する魔王は世界を戦争に導き荒廃させ、そして女神を殺め、最後は勇者に討たれ滅んだ。そう言い伝えられている。

恐らく、テスは少数民族の出身なのだろう。

スイは以前に少数民族や異端者に関する蔵書を聖堂で漁っていた時に、自分が教わったのとは違った宗教解釈の記述を目にしたことがあった。

自分の存在が本当に異端なのか、本気で悩んでいた頃だった。その記述にどれだけ救われたか。

そんなこともあり、人にはそれぞれの解釈や世界観があつて良い。彼はそのことを知っていた。

テスも少数派の解釈を信じているのだろう。

スイはそう解釈し、それ以上の詮索を止めた。

遠い空の奥、高い空の彼方……。鳴り響く新月の音は何か泣いている声のようにも聞こえた。

風の音にも耳鳴りにも似て非なる極高い澄んだ響き。

これが月の竜の声だというのならそれは、暗黒に消えた月光の代わりに大地を照らしているつもりなのだろうか。

「そういえば、スイ様！手を負傷なさっていたのでは？」

テスは不安げな表情でスイを見つめた。

「治った。治りが早いんだ」

指を少しとはいえ、骨折。そんなに早く治るわけがない。そう言いたいところだが、実際にスイの指は治っていた。

少し腫れは残っているようだがほぼ繋がったようだ。

スイはその戦闘能力の劣る部分を補うかのように、回復力と免疫力が優れていた。

怪我はするが、軽いものなら半日程度。

かなりの重傷でも1日眠るだけで傷は塞がり何とか動けるほどにまで回復する。

病気にも人より頻繁にかかるが命の危険に曝されるほどまで重症化することもなく、殆どが一晩で完治する。

それが例え流行りの疫病でも。彼の体を蝕み続けられるような病はなかった。

こんな羨ましい能力すら、持ち合わせていない人が多数派ならば化け物扱いの元。

本人はあまり気に入っではいなかった。

「本当ですか？信じられませんね。見せて下さいますか？」

テスはスイの右手をとった。

「あら！ステキ！本当に治っています。素晴らしい回復力ですね。」

良かった」

テスは安堵の表情を浮かべ、そしてやわらかく微笑んだ。

その優しさに満ち溢れた笑みは、彼女が幼い子供とは思えないほどの母性を感じさせる。

テスは本当に不思議な少女だ。容姿はもちろん人とは違っているが、そうではなくその立ち居振る舞い、言動が一般的な子供とは違っていた。

子供の多い環境で長い時間を過ごしてきたスイにとっても、初めて出会うタイプの子供だった。子供らしいのはまず見た目だけだろう。

彼女のわがままや勝手な行動すらどこか計画的に感じてしまう。

それとも、スイがテスに対して子供っぽい感情を抱くことが多々あった故にそのように感じたただけだろうか。

どちらにしても、スイはテスが幼い子供だという事実には何か違和感があった。

スイはテスと共に月のない暗闇の広野を明かりも灯さずに無言で歩いていく。

月のない夜に明かりを灯すと、方角を示す星が隠れて方向がわからなくなるからだ。

そういえば、先ほどから新月の音がしない。

スイは立ち止まった。そして、ゆっくりと闇に目を凝らすが無言何も見えてはこない。

辺り一帯は暗闇に目が慣れきても尚まだ先も分からないほど暗い新月独特の闇に包まれている。

スイはとてつもなく嫌な予感に息を飲む。

スイの脇でテスも体を固くして身構えている。

「きますす！」

キーンと鳴り響くあの音が突然で大音量で鳴りだした。

それは急に近づいて来たのか、随分至近距離で発せられているようだ。

体中に伝わるその振動は最早音とは思えない。激しい頭痛を伴う耳鳴りのように脳天に響く衝撃。

ビリビリ……

ジリジリ……

そして、強大なプレッシャーが突如彼らを射ぬいた。

「上だ！」

2人は上を見た。

「キーン」

二人の前に翼の生えた巨大なトカゲのような魔物が現れた。

魔物は羽ばたく音も立てず頭上からスーッと降りてきた。そして鋭い歯を食いしばって唸りながら、彼らを睨み付けた。

その唸り声を聞いて我に返ったスイは刀を抜いて構えた。

「竜は初めてだ」

「そんな」

流石のテスにもいつもの余裕はなかった。

激しく興奮した巨大な竜を目前に腰が抜けたようだ。無理もない。

スイは刀を右手に持ち代え、テスを左腕で抱えると素早く物陰へと隠れさせた。

「下がってる」

スイはそう言って自分は竜の真正面に飛び出した。スイのその動きには一点の迷いない。極めて冷静で時折ニヤリと笑みすら浮かべている。

銀色の羽のような形をしたウロコに覆われた竜は新月の間にぼんやりと浮かんで見える。そしてその瞳は青く強い光を放って輝いていた。

スイは飛び出した勢いのままを竜の翼を斬りつけた。

「キーン」

竜の高音の悲鳴がスイの耳を襲い、飛び散る鱗が頬を掠める。

「くっ……」

スイはその音に目眩を覚えてふらつく。けれど直ぐ様体勢を整えて再び竜に刀を向ける。

切りつけた竜の左の翼からは、竜の目の色に似た青い血が僅かに滴り落ちている。

「魔物め」

大したダメージでもないはずだか竜の息遣いは更に荒くなった。

「だめ……」

青ざめたテスが後方の物陰からスイに震えた声で訴えかける。しかし集中しているスイの耳に届くはずもない。

竜はいつでも動きだせるような低くい体勢で構えたまま。そのまま何をするわけでもなくじっとしていた。

ただ青く光る瞳だけが不気味にギョロリとスイの動きを追う。

スイも竜の周りをゆっくりと回りながら間合いを詰めて隙を探る。

「ちっ……。どこが」

竜の体は一見柔らかかそうに見える羽毛のような形をした固いウロコで覆われているため、後ろにまわったとしても攻撃を仕掛ける隙がない。それでもスイは果敢に斬りつける。

探るように右から左から、後ろから、そして真正面からも。

竜は時折耳鳴りを呼ぶあのキーンという響きを上げながらも殆ど動じない。

対峙する2者の様子はさながら牛と牛にたかるハエ。

竜との力の差は目に見えていた。

そのためか竜は進むような殺気を放ちながらも、スイを全く気にしていないようにさえ見えた。

明らかにスイに勝算はない。誰からも明瞭な状況にも関わらず、

スイもまた平然としていた。

不名誉ながら最弱剣士との呼び名も高いスイ。 魔女の時といい、
今といい何とも無謀。

いくら回復が早くてもあの足に踏みつけられてはひとたまりもない。

「そこだ！」

スイは竜の真後ろに回り込むと、竜の長く太い尻尾に刀を突き立

てた。ウロコの生え際のようになっているその場所を見つけたのだ。

その場所に決るように真っ直ぐに刃物を突き立てられた竜は、割れそうな声を上げて喚いた。

そしてスイを振り落とそうと激しく尻尾を振り回す。

「キーン」

悲鳴のように空気を切り裂く音は、いつの間にか竜の声に慣れてきていた彼の耳にさえも耐え難い苦痛をもたらす。

いつの間にか竜に突き立てた刀に必死になって掴まっていたスイの足元が竜の体から離れて宙釣り状態になっていた。

不規則に振り回されるスイの体が、支点になっている彼の手の力を奪っていく。

しきりに羽ばたかせた竜の翼からは不規則な羽音が嵐のように吹き荒れる。

独特の羽毛形をした無機質な銀の鱗はその疾風にのり竜の青い眼光を撒き散らす。それは喚きと共に静かなはずの新月の夜を喧騒へと誘う。

竜は翼を目一杯広げ体中でスイに抵抗した。

次の瞬間、スイの体は軽々と上空に投げ飛ばされた。

竜はキーンと大きく咆哮をあげる。

そして、苦痛に体を絞りながら体勢を直そうと翼はためかせた。

その時、スイが刀を振り下ろすような格好で竜の頭上に落下した。聞いたこともないような激しい激しい衝撃と、とてつもない爆音

が辺り一帯に響き渡った。

その響きが広がる様子は紫色の光が弾けたときに似ていた。

スイは右手でバランスを取りながら竜の頸椎の付近に突き立てた刀を素早く引き抜く。傷口からは青い血が飛沫を上げて吹き出した。スイは素早く竜の背を滑るように降りるとその場を離れた。

爆音が去った平原は元のように静まり返っていた。

激しく頭と耳を刺すような竜の咆哮も、それに似た闇に溶ける新月の音も、もうしない。

立ち尽くすスイの目の前に広がる空は少しずつ白んで……

「そんな……」

眩しい朝日は横たわる巨大な白い竜の体を照らした。

竜は大量に流れ出した青い血の中で今まさに息絶えようとしている。それを見たテスが血相を変えて力なく横たわる竜に駆け寄った。

「飛鏡！」

竜の瞳は優しくラベンダー色に輝いていた。

先ほどまでの猛々しい殺気は微塵も感じない。そして、その大きな口から大量の紫色の血を吐いた。

「飛鏡……」

テスは泣き崩れた。

竜はそんなテスを気遣うように静かに翼で彼女の頬に触れた。

竜が動くたびに全身を覆う、銀色の硬い羽毛がカラカラと乾いた音を立てて剥がれ落ちていく。

それでも竜は少女を慰めようと体を寄せる。

まるでスイが戦った竜とは別物。

きつと母親とはこんな感じだろう……。

母親の居ないスイが、憧れ想像する母親像。優しさ、慈しみ、献身それらを全て含む――愛のようなものを竜の薄紫色の瞳に感じた。

「テス……？」

スイは状況が飲み込めない。

「飛鏡……。飛鏡！」

テスは何度も竜にそう呼びかける。

竜は苦しそうに息をしながらもテスの姿を目で追っているようだった。

テスは何やら念じると力いっぱい竜に何かを施す。すると、竜の体がふわっと淡い光に包まれ、大きな傷がゆっくりと塞がっていった。

「ま、まほつ？」

スイは初めて目の当たりにした魔法に驚いた。

「飛鏡、飛鏡！」

竜は僅かに首を上げてテスにすり寄った。

テスの魔法で表面的な傷は消えたが、根本的なダメージが大きくもう手の施しようがないようだった。

「テス？」

スイは恐る恐るテスと竜に近づいた。

テスは一瞬キツとスイを睨みつけるが、その表情は長く持たず、すぐに涙に崩れた。

「ここ。友達です」

テスは涙を拭って静かに語り始めた。

「正気は失っていましたが……」

「キーン」

竜は小さく小さく鳴き声をあげた。そしてぐったりとまた首を垂れた。テスの足元は、竜の口から吐き出された紫色の血と、先ほど竜の首筋から吹き出した青い血とが混ざりマーブル模様になって広がっていく。

血を流しすぎた竜はテスの介抱も虚しくどんと弱っていく。

「行かないで。まだあなたの役目は終わっていない！」

テスは泣き叫ぶ。

「テス……」

スイが意を決してテスに話しかけようとしたその時だった。

「うわっ！何？何だ？」

白銀の竜とテスに気をとられていたスイの前に小さな赤い体の竜が突如現れた。そして、それに続いて更に小さな青い竜がどこからか現れた。

2匹の竜は「飛鏡」とテスが呼ぶ巨大な白銀の竜にすり寄った。

「え……。何です？」

2匹の竜はキュンキュンと声を上げて飛鏡に向かって喚いては、時折その周りを飛んだり、つついたりして飛鏡を心配しているようだった。

「炎！氷！」

しばらくすると軽快な足音と共にこのしんみりとしたこの状況には不釣り合いな明るい女性の声があった。

その声は何かを探し呼んでいるようだ。

飛鏡も少しだけ耳を立てた。そんな力はもうどこにもないはず……。

おそらく飛鏡にはもう残された時間はない。

それは、刻一刻と弱っていく様子からも明らかだった。

「キーン……」

飛鏡の弱々しい声はスイの心を締め付けた。その声は優しい温もりのように心地よいいつもの新月の音だった。

「キーン……」

そのかすれた声に応えるように赤と青の竜が頂垂れる飛鏡の顔に寄り添って喚いている。

「キュンキュン」

「キュイキュイ」

3体の竜がお互いを呼び合うように鳴き声をかわすと飛鏡は震える体に鞭打って再びスクツと首を上げた。そして諭すような穏やかな薄紫の瞳にいつぱいの力をこめて2匹の幼い竜を見つめた。

「キーン……」

精一杯の声で何かを語ったのだろうか、飛鏡はそのあと苦しそうに咳き込んだ。

「キーン……」

か細く響く飛鏡の声は淀みのない朝の空気に溶けていく。

飛鏡は渾身の力をこめて2匹の小竜を翼で包むように抱き何やら頭を合わせて話してもするように優しく頷いた。

次の瞬間、飛鏡の体はまたガクツと地面に崩れ落ちた。

しかし、なんとか向き直ると今まで以上に穏やかで弱々しい視線

を他の誰でもなくスイにチラッと見せた。

「え？」

静かに辺りを包んでいた涼やかな朝の風がピタリとやんだ。
飛鏡は静かにその瞳を瞼の下に隠した。

「飛鏡！ 飛鏡、飛鏡。ひ……」

テスは泣き崩れた。

2匹の竜たちもキュンキュン、キュイキュイ、と声を上げながら
テスにすり寄って泣いた。

スイはどうして良いかわからなかった。

飛鏡という竜がテスの友達だなんて全く知らなかった。

聞いていなかったのだから当たり前だが、それでも嘆き悲しむテ
スの姿に罪悪感が芽生える。

そして、自分の能力を恨んだ。

もし、相手が賊ならばスイは間違いなく尻尾をまいて逃げた。敵
わない相手には戦いは挑まない主義だ。

しかし、相手が魔物。それゆえ彼は戦うことにしたのだ。

それが彼の負った任務だから。

そして、彼にのみできる唯一の仕事だから。

「炎、氷。……飛鏡！」

先ほどの声の主らしき女性が息をきらせながら彼らの元に向って
きた。

女性は横たわる飛鏡を見ると絶叫した。

「飛鏡、飛鏡！　なぜ、なぜなの！」

女性は飛鏡に駆け寄ってその軀を抱きしめた。

「あなたが飛鏡の今のご主人……？　ですね」

テスはもう一度涙を拭って咳払いをすると震えた声で話しはじめ
た。

女性は泣きながら首を縦にふった。

「青い……あ悪意に、侵され……我を失って……いました」

「やっぱり……」

女性はなおも泣き続ける。テスは溢れでる涙を我慢しながら続け
る。

「邪気を払いました。その時についた。
き、傷が深くて……」。

私の治癒の魔法もきかなくて……。飛鏡は……。飛鏡」

テスは再び大粒の涙をポロポロこぼして泣き始めた。その声は先程の激しい飛鏡の喚き声よりも痛烈にスイの耳を刺す。

スイの力、それはテスの言うような魔物の邪気を払う力ではない。そう言えば聞こえは良いが、スイの力はもつと直接的な力だ。あれからどのくらいたっただろうか……。

かなり長い時間テスと見知らぬ女は一緒に泣きじゃくった。

声はかれ、目は真っ赤に腫れて……。それでもなお2人は泣き続けた。

スイは刀の汚れを振り払うとさやに収めた。

ふと見ると竜から流れ出た2色の血の色でテスのベージュのケープはすっかり青と紫に染まっていた。

ひとしきり泣きじゃくった2人はすっかり意気投合して、親しげに語りはじめた。

「あ、ありがとう。飛鏡はずっと最近おかし……. かったから」

「いえ…….」

「あたしはミリア。この子は炎と氷。飛鏡の……. グスッ……. 子供よ」

「飛鏡に子供がいたなんて…….」

テスの声もミリアの声も泣き過ぎでひどく掠れていた。

「もし本当なら、役目を引き継がせたから弱っていたのでしょようね。私はテスと申します」

スイは脇で一人つまらなそうな顔でそっぽ向いていた。

「あちらは、スイ様」

急に紹介されたスイはチラツと顔をミリアに向けたがすぐにそっぽむいて黙ってしまった。

自分が倒した竜の死を悲しむ2人の会話に入りづらいもの。そして、何より悲しむこと自体が腑に落ちなかった。相手は人に敵意を向けた魔物なのだから。

人間が魔物に恐怖心や嫌悪感を感じても、親しみを感じるわけではない。異形のを忌み嫌い、排除しようとする。それが人間。一度不吉と感じたものは、例え確証がなくても決して受け入れない。頑なで愚かな存在。

スイは唇を噛んだ。

ミリアは紹介された黒髪の男を凝視しながら少し考えた。そして何かを思い出したかのようにふらっと立ち上がった。

泣いていた影響で頭痛がするのか、頭を両手で数回叩くと至近距離まで近づいてスイの顔をマジマジと見た。

「ああ！ 聞いたことあるよ！ あんたが魔物を滅ぼす力をもった
最弱剣士スイ！」

“一言多いわ！”

スイの頬が不機嫌に引きつる。
そんな不名誉な通り名はいらない。

「でも、じゃあ、飛鏡は魔物？ そんなまさか」

ミリアは力なく地面に座りこんだ。

「あんなに強い……。ずっとわたしたちを守ってくれた飛鏡が……。
まさか魔物？」

ミリアの目に再びうつすら涙が浮かぶ。

“目ついてるのか？
見た目からして間違いないく魔物だろ！”

スイはイライラしながらツッコミたい気持ちを抑える。

「最弱のスイに倒されたからといって飛鏡が弱かったわけではない。」

人間には決して傷つけることのできない最強最悪の存在、それが魔物。

その中でも竜は最高位に位置する。

もし人に魔物を傷つける力があつたとしても、そう簡単に倒せる相手ではない。

「魔物の守りと邪気を払う勇者だっけ？ 旅の素敵な詩人に聞いたわ。異端の黒でのアホで最弱のイケメン……？って」

誰から聞いた話なのかは分からないが、やたらと悪口が多い説明だ。

スイは眉間にシワを寄せる。

スイの力を平たく言えばミリアの言う通り。

魔物の守りを破り攻撃が出来るようにし、何らかの使命を全うするためにもたらされた不老不死の能力を解除する。

そして――魔物に滅びの時を示す。

彼が魔女退治に出掛けたのは、この力で魔女を滅ぼすようにと王命が下つたからだつた。

最弱と名高い剣士がなぜに、こんなにも無謀なのか。それは倒す自信があつたからだつた。

スイもそこまでバカではない。勝算を十分に考慮しての行動であり決して無謀な作戦ではなかつたのだ。

彼が弱いのは対峙した相手が魔物以外のものの時。

相手が魔物ならば決して最弱剣士などとは呼ばせない。

「その説明した男、碧眼茶髪で変な喋り方じゃなかったか？」

スイは何かを思い出して苦い顔をした。
スイの問いにミリアは目を丸くした。

「そつそつ」

ミリアは鼻声で答える。

「シンか……。チッ」

スイはイヤな顔で舌打ちをした。

「シン様って言うんだ。今まで見たこともないくらいのイケメンい
え美形だったわ。絶世の美男子って感じ。そのシン様がイケメンっ
て言うんだから期待していたのに」

ミリアはスイを見て落胆の表情で深いため息をついた。
どこまでも失礼な女。

スイはまた眉間にシワを寄せる。

「シン様の話はそれはそれでいいとしても」

飛鏡のことといい、今の話といい、ミアは不思議なほど切り替えが早い。

「なんですの？」

「飛鏡はセレサ様の守護者って言うていたのに、何で魔物なの？」

ミアは飛鏡の軀をさすりながら話はじめた。
テスは険しい表情で口を噤んだ。

「セレ……。って女神様のことか？」

その話に食いついたのはスイだった。
セレサ……。それはこの世界で最も信仰を集める女神の名前だった。

「あー！」

スイは、何かを思い出した。

以前スイが祭祀の文化史という本をクリスに何かの罰として読まされたとき。

「女神に仕えし清らかな白き神獣……」

そんな記述があったような気がする。

「そうそれ！」

女神を讃える教団のシンボルは月。そして飛鏡は女神の守護竜。それでテスのいった月の竜となるわけだ。

スイは納得した。

しかし、それと同時にスイは激しい不安に襲われた。

女神に仇をなすと言われる異端の黒であり。

そして女神と対極に位置する力を持つ。そんな存在の自分。

スイはこみ上げてくる不安を想像の中ですら明確な言葉にすることを拒んだ。

「でも、飛鏡が魔物？」

魔物は魔王が創った化け物でしょ？ だったら魔物は女神様とは逆の存在だわ」

しかしミリアの推測がスイの拒んだ事項を掘り下げようとする。そしてその言葉はスイの不安を増長させた。

“女神と逆”

異端者と蔑まれるのには慣れていた。気にするような事ではない。そんなことは、ただの偏見だと理解していた。けれどそれは自分が不吉な存在とする確固たる証拠が何もなかったからだった。

スイは動揺を隠そうと必死だった。

自分の存在意義にこれほど不安と疑問を感じたのは、子供の頃以來だった。

「史実に基づく善悪は歴史の解釈によって如何様にもとれます。ましてや、人が伝えた歴史に伝道者たちの先入観や感情が込められていないとは言いい切れません。ですから伝えられたことが真実というのは間違いです」

そこへ黙って様子を見ていたテスが話に割って入ってきた。

「歴史自体が歪められている恐れもあるのですから」

テスはそう言うと、たびたび見せるあの大人びた表情を見せた。テスの言葉に他意はなかった。ただ的確にミリアの問いに答えただけ。それでもスイはその言葉に幾分救われた。

しかし、芽生えた不安は着実にスイの心に根を張った。

昇りきった太陽は澄み切った空を青く照らしていた。

その青く澄んだ空が何かを失った彼らの心を埋めてくれるような

気がして、みんなそれぞれに空を仰いだ。

女神の従者（後書き）

魔法のiらんどで執筆したものを手直しいれながら更新しています。

遅いですよね。

もっとサクサク直してあちらの最新話に追いつくようにしたいです。

聖者たちの城（前書き）

長らくお待たせしました。

ここからが本編のような感じになります。

聖者たちの城

その城はこの歪な世界の中心にあった。

東へ行けば果てなく続く砂漠。

西には磁場の狂った深い森。

南に人を拒むかのように聳える険しい氷山。

北に誰もが恐れる燃え盛る火山。

それらを抱えたその世界の中心は、どこまでも続くかのように見える広い平原の真ん中が砂漠と見紛うほどに乾いた砂地という異様な地形していた。

その砂地の中央一滾々と湧き出る水を頼りに、その堅固な城は築かれていた。

この世界における唯一の国。その国を統べる王族の住む壮麗で堅固なクワイアト城。

スイはそのまるで要塞のような高いその城壁の前に佇んでいた。少し後方には、かましい2人組。その周りには小さな竜が飛び回っている。

城門はここから少し東のほう。そこにはスイの通行証と同じ金獅子を踏みつける青竜のエンブレムが掲げられている。ロイヤルエンブレムだ。

何を暗示するのは最中ではないが、こつこつデカいとおどろおどろしい雰囲気さえ漂う。先日尋ねた聖堂の重厚な扉以上の威圧感をもって佇んでいた。

「おい、いつまでしゃべっているんだ。さっさと歩け！」

いつの間にかついてきたミリアと名乗る素性知らずの女性は彼ら一行にすっかり馴染んでいた。テスといい、ミリアといい、スイの周りに寄りついてくるのは何故か変わり者が多かった。

スイは比較的良識のあるタイプの人間だった。人目を気にして生きてきたために身に付いた処世術のようなものだろう。異端者の彼が人として生きるためには絶対的に必要だったのだ。

そのために彼を取り巻く変人たちの行動にはいつも頭を悩ませていた。毎度毎度、彼の理解を遥かに越えた行動で彼を脅かす。それも悪意からではなく素なのだ。それがわかるだけにスイにとっては更に頭の痛い問題だった。

「いい加減にしるよ」

スイは啞然とした。2人が居ない。

彼が2人の居た方向に駆けてい行くと砂丘に足を取られたミリアが流砂で抜けられなくなっていた。

その脇ではテスが必死にミリアを引き上げようとしていた。

しかし、テスの足元もやや危うい。小さなその足はサラサラした砂の流れに逆らうほどの器用さも力もない。舞い上がる白い砂煙が今にもテスを飲み込んでしまいそうだった。

「テス離すなよ。それから飲まれるな！」

スイはそう言うと、刀を鞘から抜いて流砂に突っ込んだ。

ほどなく流砂は緩やかに収まり、その中から砂まみれのスイが現れた。

「ばっ、化け物！」

ミリアは目を見開いて大声で叫んだ。無理もない、頭巾を頭から被ったスイの体は砂ですっかり色が変わっていた。まるで別人のようだ。いや、むしろサラサラと流れ落ちる砂に原型すら失い人とは思えないような姿になって見える。

しかし、スイは悪態ばかりつくミリアの失礼な言動にはもう慣れっこだった。スイは反応もせず、次の行動にうつる。

「サンドサッカーが多いからな。足元に気をつけてさっさと歩け。喰われるぞ」

スイは頭巾をとって髪についた砂を払いながら穴の中から這い出した。

城の周りの砂地はサンドサッカーと呼ばれる正体不明の魔物が巣くっていた。サンドサッカーは砂漠地帯の多いこの国でここだけに生息する珍しい魔物だった。

それは城へ向かう人々には脅威。しかし、奴らは城から出る者や城へ招かれた客は一切襲わない変わった魔物だった。

そのためそれはまるで城の守備を強化するために雇われた用心棒のようだった。

ミリアは身を竦めて震え上がった。

「なんで！ どうして、あんただけ襲われないのよ」

テスは、砂地にぺたんと座ったままのミアに手を貸した。
立ち上がったミアは尚も自分を無視して歩くスイに詰め寄る。

「なんでなの！」

歩きたびに白い砂煙がフワフワと舞い上がる。
風が出てきたようだ。それを吸い込むとしばらくは咳が止まらな
い。

「話す余裕はない。とにかく歩け」

スイはただそう言うと、再び城に向かって歩きだした。

テスはそのすぐ後に小走りですいていく。

立ち尽くしていたミアも、こんなところに置いて行かれては堪
らないと駆け足で彼らの背中を追った。

平原から続く砂地は障害物も少なく、頻繁に強い風が吹き抜ける。
その風に煽られ白い砂煙が3つそれぞれの足元からサラサラと立
ち上っていた。

城門はまるで絶壁のように彼らの前に立ちはだかった。

その遙か頭上には強風に煽られた旗がバサバサと音をたててな
びている。

黄金の獅子を踏みつける青色のドラゴン。そのエンブレムの掲げ
られた旗は侵略や征服の歴史の象徴にもみえる。

戦争する相手国さえないこの平和な国、クワイアトには城壁・城門・エンブレム・国旗どれをとっても似つかわしくなかった。

スイは城門に近づいて小さな連絡口から通行証を見せた。

ほどなく開かれた出入り口から兵士たちが現れたかと思うと、すぐにスイたちを取り囲んだ。

「お前のように卑しい身分のものが何故ロイヤルエンブレムを持っているのだ」

スイは、またかと舌打ちをする。この類いの言いがかりは慣れっこだった。しかし異端の黒だからといって毎回職務質問されるのはさすがにうんざりしていた。

どれだけ内部連絡網に不備があるのだろう。

いい加減にしてほしい。

スイは大きなため息をついて兵士たちに説明を始める。

だが、いつものことながらなかなか信じて貰えない。

スイは毎度のやり取りにかなり苛ついていた。しかし、ここで暴れると更に事態を悪化させる。

歯を食い縛って必死に口角をつり上げる。そして、口について出そうな汚い言葉をぐつとこらえて、丁寧に説明をした。

「証拠はどこにある」

必ずでるフレーズだ。

これも聞き飽きた。

「守衛長官か、班長を呼んでくれ」

下っ端では全く話しが通じない。これもいつものことだった。

「生憎、今日は祭りだ。長官も班長も内部警備に回っていて不在だ」

「チツ」

なんてタイミングなのだろう。スイは再び舌打ちをした。眉間には深いシワが寄っている。

スイに言われておとなしくケープを頭から被って後ろで控えていたテスもそわそわし始めた。

「ミアは我関せず……」といった雰囲気で竜たちと遊んでいる。

確かに妙な一行だ。怪しく思われても仕方がない。

スイはうなだれた。

広い砂地が広がる地域の昼間は季節に変わりなくジリジリと暑い。そんな炎天下のもと、門の前で待ちぼうけを食らわされた3人はそろそろ限界だった。

「誰か内部の情報に詳しい役人はいないのか？議員さんでもいい」

スイは頑なに門を閉ざしたまま開けようとしないう門番に喚く。

「悪く思うな。今軍の執行部に伝達している。身元が分かれば直ぐにでも入れる」

異端差別者の門番とスイでは争いになると判断したのだろうか。守衛のリーダーが対処してくれることになった。

しかし事態はあまり変わらない。ただ、スイへの当たりが柔らかくなっただけ。

「スイさま、暑いです。喉が乾きました」

静かにしていたテスは髪を隠すためにケープを被っていた。そのため暑さで更に体力を消耗しフラフラしている。

「スイ！ お腹がすいたんだけど」

先ほどまで竜達と戯れていたミアも両肩にその竜をのせて近寄ってきた。どうやら遊びに飽きたらしい。

元々は一人旅の準備しかしていなかったため、手持ちの水も食料も底を尽きている。

スイ一人ならば明日まででも待てる。しかし幼いテスにしてみれ

ばもう待てる限界はとっくに超えていた。汗だくの顔は熱を持ち始めたのか、真っ赤だ。

「せめてこの子だけでも中で休ませてやってくれないか」

スイはテスを兵士たちの前に押し出した。そして、テスに被せられたケープのフードを取ろうとした。少女の美しい白銀髪を見れば身元など関係なくテスだけは中に入れて貰える。

しかし、テスはスイの手を阻んだ。

「お前も異端の黒か、なんて不吉な一行だ」

異端差別者の門番は頭を頑なに隠そうとするテスに蔑んだような目を向けてに吐き捨てる。

謂われのない差別。スイは申し訳なくて唇を噛む。

絶大な権利と翳すことが出来るはずのロイヤルエンブレムが毎度スイを苦しめる。

“こんなもの返上しなければ……”

スイは兵士の手の中にある通行証を睨む。

「どうなさいました」

門の奥から聞こえた女性の声に、兵士たちの間に緊張感が走る。

「これはこれは……。どうなさいました」

「身元を確認して欲しいものが居ると聞いて参りました」

どうやら彼ら一行の待ち望んでいたちよつと偉い人が来てくれたようだ。その人物は彼らの身元を確認するという。

「しつ、しかしクレア様がわざわざあの様に卑しい身分の者に……」

兵士たちが制止するのも聞かずにその女性は門の隅の小窓からスイ達を確認すると、門から出てきた。

「スイ様！」

女性は門を出るとスイにひれ伏した。

「な、何をなさいます。お止め下さい」

兵士たちは女性を諫めるが女性は彼らの手を払い除ける。

白いスーツに身を固め美しい金髪を兵士たちのように無造作に短くしたヘアスタイルのその女性は気高く深い色をした碧眼を真っ直

ぐにスイに向けた。

「姫様お止め下さい」

女性は真っ直ぐな視線でスイを射る。するとスイはばつが悪そうに女性から視線を逸らした。

「あなた方も態度を改めて下さい。こちらはブラックアイズ退魔総帥にあられますよ」

兵士たちの顔色がみるみるうちに青ざめた。それもそのはず、スイは彼らの上官にあたるのだから。

「お止めください、クレアラ姫。私の役職は名ばかり。なんの権限もありません」

スイは面倒くさそうに棒読みで答える。

クレアは再びスイを睨みつける。

「姫と呼ぶのはお止め下さい。以前も申し上げましたが……」

クレアは何か言いかけたが、そのままその言葉を飲み込んだ。そして、難しい顔をしたまま一行を門の内側ークワイアト城下へと

案内した。

門の内側はひんやりしていた。

分厚い石造りの壁が昼間の暑い日差しと灼熱の風を遮ってくれるからだろう。

門から続く城壁の壁の中は通路がある。その天井近くにつけられた小さな明かりとり窓から細い光が幾つもその空洞の中に筋となって差し込んでいる。3人はその中をクレアに案内されて静かに歩いていた。

「く、クレア？」

しばらくの沈黙の後、スイはうかがうようにクレアに話かけた。

クレアは静かに立ち止まると急にクルッと向きを変えてスイを睨んだ。

次の瞬間、パンツッと薄暗い通路に乾いた音が響き渡った。

「……つつう」

スイは頬を抑えた。

クレアはスイを叩いた右手を握りしめ、わなわなと震えている。

テスとミリアは肩をすくめた。

泣いているのだろうか。クレアは静かに俯いたまま小刻みに震え続けている。

スイは、クレアの肩にスツと手を伸ばした。

「この女ったらし！」

再び乾いたクラブ音と共に、次はクレアの罵声がキーンと共鳴音をあげる。

「なっ……。なんだよ」

スイはまた頬をおさえながら顔をあげる。すると目の前には鬼の形相をしたクレアが物凄い剣幕で自分のほうを睨み付けていた。

「ずっつと音信不通だと思ったら、女と帰ってくるのね。それも毎回！」

スイはテスとミリアをチラッと見た。

そしてうんざりした表情を見せながらゆっくりと向き直る。そして怒りに満ちてもなお美しいクレアの瞳を見据えて話し始めた。

「いや、あれは女じゃないだろ。クレア……」

「いいえ、どうみても若い娘だわ。それも二人もね」

しかしその言葉はすぐに遮られてしまった。そしてクレアは燃え
たぎる怒気に満ちた鋭い目と声でさらにスイを刺す。

「毎回城に若い女を連れ込むなんて信じられないわ」

「だから」

「今度は何と言いつたのかしら。いいえ、もう聞き飽きたわ」

「だからクレア」

頭に血が上ったクレアにはスイの話など全く耳に届かない。

その様子にいつものことだとばかりにスイは深いため息をついた。
しかし、その行為が火に油を注ぐ。

クレアの中に張りつめていた何かがプチンと音を立てて切れた。

「いいわ。もう終わり。もう疲れたわ。私、結婚しますから」

その言葉にスイは目を見開いてクレアに向き直った。

「えっ……」

「私、結婚しますから。先日の縁談お受けしますね。あなたもお好
きに」

クレアはそう言つと何やら書類にサインをしてスイに渡した。

「入門許可と身分証明書でございます。ブラックアイズ閣下」

クレアは冷ややかにそう言うと一人歩き去ってしまった。

ひんやりと静まる通路にクレアのヒールの音が無情にも響き渡る。スイは声も出なかった。その冷たく無機質な音が遠ざかっていくのをただ聞いていた。

去り置き去りにされたスイはしばらくの間クレアの歩き去った方向を向いて茫然としていた。何が起きたのかも今一つ理解できていないようにポカんと。

「あ、あの」

テスが申し訳なさそうにスイの顔色を伺いながら声をかける。

スイはどんな反応をしたら良いのか一瞬戸惑ったような、不快感を露わにするような……。それでもって深い哀愁感の漂うような何とも言えない複雑な表情をして黙り込んでいる。

「あなた、マジでお姫様と付き合ってたの。まさか、今ふられた！」

空気の読めないミリアは今見たままのことをそのまま言葉にする。

スイは頭を抱えた。

クレアはスイの恋人だ。今となってはだったと過去形で紹介すべきかもしれない。国王の末娘だが王位継承権を放棄して上院議員をしている。権利を捨てたのはスイとの未来を考えてのことだった。まさかそのクレアが自分以外の他の誰かと結婚だなんて……。スイの脳裏に幼い頃の悪夢が蘇る。

〳〳彼の好きになった女性は皆彼の親友を好きになる〳〳

「まさかな」

悶々とした気分だった。

しかし、この城下に居る限りスイは自分一人好き勝手な行動をとることの許されない立場だった。退魔総帥。それは名ばかりの役職であったが、それであるが故にスイは必要以上に行動を制限されていた。

「しかしあんた、偉い人だったんだね」

ミアはスイの顔を覗き込む。

その顔はいつも以上に不機嫌そうで、ミアは口を噤んだ。

「名ばかりだ。誰も俺がそうであることも、何をしているかも知らない。直属の部下もない。軍隊もない」

スイは悔しげに吐き捨てる。議員や爵位を持った貴族よりもスイの地位は高い。しかし、知る者が居なければそれも意味をなさない。

「しかし、スイ様は孤児ですよ。何ゆえ高い地位を得られましたの？」

クリスと話し込んでいた際に聞き出したのだろうか。テスはスイが孤児だったことを知っていた。

孤児のスイには身分はないに等しい。しかも、彼は国王が首長にあたる宗教における異端者。それが国の軍事に多大なる権限を持つ総帥とは誰もが疑問に思う。

ミアも静かに頷く。

スイは髪をクシャクシャにした。かなりイラついている。

「近衛兵試験の帰り際、城の外でサンドサッカーに喰われそうになっていた女性を助けたんだよ。それを見ていたクレアから国王の耳に入って……」

「ああ！ 魔物を倒すなんてスイ様にしかできませんものね。都合よく飼いやられたわけですか」

「な……！」

テスはある程度かんと罵声を浴びせる。しかしスイには反論のしようがなかった。

宗教や政治や権力者に対する反発は誰よりも強く批判的でありながらも、それらに保護され優遇される立場に批判する気持ち以上の強い憧れを持っていた。

だから、自分の力が特別だとお墨付きを貰えたことも、それを行使することで得られる地位や権限も甘んじて受け入れた。むしろちゃんとした職につけたことを歓迎した。

それを飼われているなんて言われると心苦しい。怒りより前に動揺しなかった。

「閣下！」

嫌な沈黙はスイを喚びに来た兵士の一声にかき消された。

「お戻りになられたのですね」

スイはようやく我に帰ったように表情をキリッと作り直す。

「国王陛下がお呼びでございます。直ちに謁見の間に」

「わかった。城に上がる前に宿舎で着替えてきたい。すまないが客人を案内してくれないか」

「はっ」

兵士はそう言つとスイから何かを受け取りテスとミリアの前に歩み出た。

「恐れながら閣下に代わり城下並びに城内を案内させていただきます」

そう言つと兵士は2人を城下へと誘つ。

「スイ様……」

テスは不安げにスイの顔色を伺う。

また置き去りを決め込むのではないか……。テスの目はそんな疑いの色が浮かんでいた。

「一緒に謁見するつもりか？ とりあえず風呂に入つて着替えて飯にでもしろ」

「は、はい。でも」

テスは尚も不安げな目で彼に縋るように見つめる。

「心配ない。また夕方にでも会おう」

スイはそう言うと、女性二人を残してその場を離れた。

本当ならばすぐにクレアを追いかけたかった。しかし立場上プライベートを優先させるわけにもいかない。

また、身分違いの2人にはやたらと障害も多い。そのため、お互いのためにも関係が公になるのは避けなければならなかった。

城下はお祭りの準備で浮かれている。

街に流れる軽快な音楽はスイの重い足取りを少しだけ軽くする。

しかし、飾られたものを見て一瞬スイの足が止まった。

「待てよ。今日は女神の降誕祭？ ああ、仮装パーティーかよ」

スイは深いため息をついた。

「行きたくないなあ」

スイはブツブツ独り言を言いながら、兵士たちの宿舎に入っていた。

スイは退魔総帥の称号を持ちながら、城下に邸宅を構えず一般の兵士たち同様に寄宿舎に住んでいた。

しかもスイが総帥に任命されたのもほんの一年前ほどのこと。

その後、殆どの時間を討伐の名目で旅に出ていた。そのため大半の兵士たちはスイがそのように高い地位に就いていることなど知りようがなかった。

それどころか未だに下級兵士のままだと思っている。

「お、スイじゃないか。久しぶりだな」

見覚えはあるが名前のわからない同僚が声をかけてくる。

「ちょっと地方に行かされていたんだ」

スイも自分が上官であることなど報告しないので誰も知るわけがないのだが。

「あ……、閣下？」

時々知っている者も居たりする。

しかし、まさか総帥が寄宿舎に住んでいるなんて夢にも思わない。そのため彼は騒がれることなく、恐れられることもなく過ごすことが出来た。今日までは……。

彼は軽く汗を流すと真新しい軍隊仕様の正装に袖を通した。

黒を基調とし赤の装飾を施された軍人専用の正装と、同じく表が

黒で内側が赤のマントはスイ用に仕立てられた特注品。
それも、他の部隊との差別化をはかるために仕様も異なる一点物だ。

新品のブーツを履き。そして階級章をつける。

「飼い慣らされて……。そうだな」

スイはテスに言われたその言葉を思い出してため息をついた。
今日は気の滅入ることばかりだ。

スイは気合いを入れようと鏡に向かって数回自分の顔を叩く。

「よしっ!」

そして、自室を出るといつものように寄宿舍の休憩室を横切って
出口に向かおうとした。

「え!」

「スイ?」

「閣下?」

スイが休憩室に現れた瞬間、その場の空気が凍りついた。

「どうしたんだ？ 変な顔して？」

スイは怪訝な表情で休憩室を見回しながら様子を窺う。

「いや、その格好……。冗談だよな？ 仮装？」

「そうかそうか、お前姫様と仲良しだったよな。えすこつとってやつなのか？」

「な、なぜそれを」

スイの顔が急に真っ赤になった。

クレアとの付き合いは秘密のはずだったがバレバレだったらしい。隠し通していたつもりだったのが尚さら恥ずかしかった。

もしかしたら、クレアの縁談が持ち上がったのも国王の耳に2人の関係が知れてしまったからかもしれない。

「顔の良い男はいいよなあ。お姫様と遊べるんだぜ」

少し位の高い熟練兵士たちが焦るスイをからかって遊び始めた。

スイは恥ずかしさと焦りから真っ赤になって黙り込んだ。

熟練兵士はいつもすましたスイのそんな様子が面白くて更にか
かいつける。

「お止め下さい」

しかし、若い兵士が仲裁に入った。

「何だ？」

「部隊長はご存知ないのですか？」

「なにがだよ」

「いや、良いんだ」

「良くありません」

若い兵士は床に跪いた。

「数々のご無礼申し訳ありませんでした」

その行為に再び兵士たちは静まり返った。
熟練兵士たちも目を白黒させながらその様子を見ている。

「いや、良いから。頭を上げてくれ」

「わたくしにはもったいないお言葉」

スイは髪をクシャクシャにする。

「何なんだよ。スイの奴まさか本当に出世したのか？」

若い兵士は熟練兵士たちに掴みかかると力づくで床にひれ伏させた。

「部隊長！そのような態度は許されません」

「何するんだ」

「ブラックアイズ閣下、どうかお許し下さい」

「はぁ………？ 閣下？」

「え………」

兵士たちに動揺と緊張が走る。

ブラックアイズ……。ふざけた姓だ。

それはスイが忌み嫌う西方枢機卿によってもたらされたものだった。

た。

その名は本人が知らぬ間に、その名前の主がスイであることが公にならないまま世間で一人歩きをしていた。

「ブラックアイズって、最弱のスイが退魔総帥なわけないだろう」

しかし発した言葉とは裏腹に熟練兵士はスイの姿を恐る恐る見上げる。

長身のスイの肩と襟元には、国の特別機関である退魔府の赤い獅子エンブレムと軍人における最高位を示す金の階級章が誇らしげに輝いていた。

熟練兵士同様疑惑の目でスイを観察していた兵士たちの血の気が一気にひいた。

「まさか、まさか」

無礼な兵士は口をパクパクさせたまま硬直した。

「いいから。気にしないでくれ。俺は異端の黒で孤児出身の軍人。階級はともかくあんたらより身分は低いんだら」

スイは頭をクシャクシャにしながらため息をついた。

「敬礼！」

若い兵士が号令をかけると、その場にいた兵士たちは一斉に立ち上がりスイに頭を垂れた。

「や、止めてくれよ。苦手なんだ」

スイの髪はぐちゃぐちゃに乱れていた。

「もう、いいかなあ？　これから陛下に謁見なんだけど」

「はっ！　いつてらっしやいませ」

スイは気まずい空気の寄宿舍をでた。

「なんで総帥が寄宿舍に住んでんだよ」

扉を閉めると後方から兵士たちの愚痴がこぼれるのが聞こえた。クレアにも指摘されたことだった。

総帥が寄宿舍に住むなんて他の兵士や官僚たちに示しがつかないと。

何度も厚生部署から屋敷を建てるための土地や古い邸宅の斡旋があった。しかしスイには必要とは思えず、全て断っていた。

スイがこの城下にいるのは多くて月に2日。邸宅があっても明らかに無駄だ。

「ケチなんじゃねえか？ 身分もないし、貧乏が身に染みてるとか」

失礼な熟練兵士が悪口ともとれる発言をしている。

今、踵を翻してドアを開けたらあのオッサンはどんな顔をするだろう。

スイの頭に一瞬そんなイタズラ心が芽生える。

「確かに！ あいつ金使つてるところなんて見たことないもんな」

「絶対ケチだ」

しかし、次々に誰もがスイの貧乏性説に賛同する。

ここまでヒドい言われようではさすがのスイも中に入るのを躊躇せざる得なかった。

そんなふうに使われていたのかと思うと顔から火が出るほど恥ずかしかった。

「どうせ貧乏性だよ」

やはり今日はさんざんな目にはかり遭う。厄日なのだろうか。

「謁見も何か嫌な予感がするなあ」

スイは嫌な気分のまま宮殿へと歩みを進めた。

魔女を倒せなかった負い目もある。

あの魔女は魔物じゃないから自分には倒せないなんていう言い訳が果たして通じるだろうか。

クレアとの関係がどれほど周りの人に知られていたかも気になる。国王の耳に入れば、どんな処遇が待っているのかそれを考えるのも怖い。

歩きながらブルツと身震いをした。

しかし、スイは人の多い大通りに出ると自然と姿勢を正す。

条件反射のように人目のあるところでは良く見られようと取り繕ってしまう。

そんなふうには人の目を気にせずにはられない自分には少し凹む。

そして思い知る。テスの言うとおり、いいように使うために飼いや慣らされている事実。

そうするのに都合の良い自分の性格も恨めしい。

スイは唇を噛み締める。悔しくても、スイは人目を気にせずにはられない。そのように育ったのだから、もう体に染み付いた習慣のようなもの。

どんな不安や葛藤を抱えた情けない心持ちでいても悟られぬよう平静を装ってしまう。今のこの程度の動揺で表情が情けなく崩れるようなことはない。

ビシツと背筋を伸ばして大通りを闊歩するその姿は自信に溢れた気高い軍人以外の何者でもない。退魔府仕様の軍服はもちろん、異端者の証である黒い髪や瞳ですら人々に畏怖の念を芽生えさせ、彼の堂々とした出で立ちに更なる重厚感を加える。

女性たちはそんなスイの姿に見惚れる。

そんな視線を感じているのだろうか。

もともと少し切れ長の目を根性で更に釣り上げキツと唇を結ぶ。

やや瘦けた頬もゴツゴツした首筋もスイの男らしさを引き立てる。

異端色はそれにスイに有るはずもない悪い男のオーラを装わせる。

「あの……」

花売りはスイに売り物の花を赤く頬を染めて差しだす。ここで微笑んで受け取れば、花売りの女性の心はスイのもの。けれどスイは手でそれを遮る。

異端の黒の男とまともな未来を望む女などそう居ない。

自分がどんな風に見られているのかよく分かっているつもりだった。

異端者の男。悪い男。でもそれなりに身元が保証されていて見た目も悪くなくて……。

それらの条件を満たしたスイは遊び相手として女性にモテた。それは自覚していた。

けれど女性たちの望む悪さは愚か、真面目で堅実で誠実で儉約家のスイに女性たちはすぐに飽きて彼の元を去った。

しかし彼はそのことを恨んだりしなかった。仕方のないこと。諦めの中で自分が恋愛対象として見て貰えるだけでもありがたいと思っようになっていた。

クレアに出会うまでは。

スイは羨望の眼差しを浴びながら大通りを王宮に向かい歩いた。通りの脇には女神を称える装飾が豪華に飾られている。

貴重なシンシアグラスの花を象った青色の造花と黎明の勇者を称える白い布地の装飾がそれをさらに彩る。

黒と赤の軍服を着た軍人はスイ一人だけ。

聖なるものを象徴する白と青に彩られた街との色の対比が彼の存在をより目立たせた。

やがてその装飾にあのエンブレムのついた国旗が加わる。

その場から前方を見上げると目指す美しい宮殿がみえる。宮殿は柔らかな曲線が印象的な白い石造りの建物。造られた時代は女神達が生きた創世記まで遡る。

その前に構える第2の城門は先ほどの城門と同じく厳ついまでに堅固だったが、細やかな彫刻がふんだんに施されていた。順番に見ていけばこの国の成り立ちが分かるとも言われる古い彫刻。

しかし、今はそんなものを悠長に眺めるような暇はなかった。

気は進まないが国王からの召還は絶対。

彼は城門をぐぐった。

今度は足止めを食らうこともなかった。

見た目の印象は大事ということだろうか。

はじめて袖を通したこの軍服の威力にスイは少し不快感を覚えた。

聖者たちの城（後書き）

ゆっくり更新にも関わらず読んで下さってありがとうございます。
この回から、クワイアト編になります。徐々にキャラクターも増えて行きます。

続きは修正が済みましたら、魔法のいらんどから順次転載して参ります。

どうかお付き合いください。

親しき懐かしき敵（前書き）

長々と更新を停滞させてしまいました。
すみません。

ここからは宮中の場面になります。

親しき懐かしき敵

王宮内は特別な宴を控えて、いつも以上の賑わいに包まれていた。

祭祀の参加という名目で国中の要人が召集されているためだろう。宮中は至るところ、客人とその従者たちで溢れかえっている。

その人ごみの中にあってもスイの異質さは目立った。

黒を忌み嫌う国民性を無視した容姿に装い。

そして、そのダークなイメージを払拭するほど整った容姿が更に彼の元に人々から奇異の視線をかき集める。

彼はその突き刺さるような羨望と嫉妬と侮蔑の混じった居心地の悪い空気を避けるように、早足で広間の前を横切ってゆく。

広間のステージからは今日の宴で披露される「黎明の唄」を練習する声が微かにもれている。もうそろそろ最終調整だろうか。この唄に登場する人々に扮した仮装をして女神たちの時代に思いを馳せる。これが今日の祭りの主旨らしい。

しかし、機能的でない古い衣装着せられた要人たちは情けないほど一人では何もできない。あちらこちらで従者を呼び情けなく叫ぶ声飛び交っている。

そんな馬鹿馬鹿しい様子に緊張気味だったスイの口元に嘲笑混じりの笑みがうつすら浮かぶ。しかし直ぐ様表情を取り繕うと、謁見のために王の執務室へと急いだ。

「アイゼル上院議員を見なかったか？」

そんな中、彼の横を誰より焦った様子で通り過ぎた官僚と侍女の話にスイは聞き耳を立てた。

どうやらクレアを探しているらしい。

「婚約発表を今日になさるなんて」

「お相手の方のご都合もありますのに」

スイの顔が一瞬激しく歪む。

“婚約？クレアが？”

先ほど別れ際にクレアが吐き捨てるように言った言葉がスイの頭の中でこだまする。

クレアの話はただの当てつけだと思っていた。万が一見合いをするにしても、断わるはず。そして自分のもとに帰ってくる。そう心のどこかで思っていた。

それだけ彼女を信じ、愛していた。

“何かの間違いだ”

彼は自分に言い聞かせてまた進行方向に視線を戻す。

“もしかしたら、婚約者がオレってこともあり得……”

途中まで考えたプラス思考に少しだけ期待する。しかしそれは広間の壁際にかけられた装飾鏡に映った自らの姿に遮られる。

いくら王位継承権のない姫君とはいえ、異端者のスイに王家が婚約を許す訳がない。それはお互いの気持ちを通じ合ったときから、覚悟していた現実だった。

故に、時がくれば彼はクレアとの未来のため、全てを捨てて彼女をさらう覚悟でいた。

しかし、彼女にはそこまでの覚悟がなかったのだろう。

“仕方がない”

まるで呪文のように頭の中をこだまするのは、いつものフレーズ。自分を支配する劣等感をまるで肯定するようなその文句に何度も助けられたが、今度はかりはその情けない響きに怒りがこみ上げた。

「クソっ！」

短く悪態をつくくと、スイはクルッと向きを変えてクレアの自室に向かうことにした。

“失えない”

強い思いを胸に一步踏み出そうとしたスイ。

しかし、残念……。

「スイ！」

後方から彼を呼び止める聞き覚えのある声にスイは凍りつく。彼は気持ちを落ち着かせながらゆっくりと振り返る。声の主を確認してスイの表情が再び曇った。だが歪みそうな表情筋を必死に釣り上げ、彼は向き合った相手に対して笑みを浮かべてみせた。そして、挨拶をしようと口を開く。

「スキキヨツキヨウ」

しかし、出来上がったのは思いっきり噛んだ上に裏返った声。そして余りに不自然に引きつった笑顔。

声の主である枢機卿は不機嫌そうな表情で彼を睨みつけた。

「久しぶりの再会にも関わらずまともに挨拶も出来ないとは。見た目以上に無礼な男よ。お前のような者が特別府の総帥とは世も末よのう」

“ムカつくっ”

スイは齒を食いしばる。ただでさえ機嫌が悪いというのに、最も会いたくないモノに会ってしまった。

いや、遭ってしまった。スイにとって目の前の初老の男は災害ともいえる不運だった。

「ご機嫌うるわしゅう。おかわりないようで」

棒読みの挨拶をしながら目は逃げ場を探してキョロキョロと泳ぐ。

「陛下がお前をお呼びだとお聞きしてね。お前は高貴な御方と向き合う場面ですぐに逃げるクセがあるからね。失礼のないように引立ようと思ってきたのじゃよ」

“余計なお世話だ。高貴な存在が苦手なんじゃない。あんたが苦手なんだよ”

腹は立つが反論するだけ無駄だ。もしも何かを発すれば、それ以上の言葉をもって罵られるのも十分承知だった。スイの育った聖堂の最高権力者はそういう人物なのだ。お人好しクリスすら苦手だといくらいだから相当だ。

「ではゆこうか」

「はい、猊下」

スイはクレアを思い、後ろ髪引かれる心を胸にそっとしまいだ。

そして、枢機卿に連れられて国王陛下との謁見のために宮殿の奥へと更に進んだ。

枢機卿の衣装は聖職者とは思えないほど絢爛豪華な装飾が施されたものだった。例え祭りのために用意された古代の衣装だとしてもこれを選ぶ人の趣味を疑うほど豪華な衣装。それは昔この辺りを治めたというランディー二家の宰相をイメージした衣装らしい。

戦いの中で悪意に囚われて最後は魔王となる悲劇の聖職者。悲劇……はいらないかもしれないが、このオヤジにはぴったりの格好だとスイは嘲笑した。

「お前さんは、なんで私の甥役なんだ？まったく汚らわしい」

「おれ……。わたしは、扮装ではなく正装です。退魔府仕様なので色は他とは違います」

「そうかい。てつきり黒の竜騎士イアン・ランディーニの扮装だね。しかし似てるね。黒い感じが特に。ヒヒヒッ」

“感じの悪いオヤジだ。こんなのが枢機卿だなんてそれこそ世も末だ。胸くそ悪い。本当に心から関わりたくない”

スイは深呼吸して気持ちを必死に落ち着かせる。これから国王陛下にお目通りするのに、不機嫌な表情では失礼になる。

「退魔総帥ブラックアイズ様並びに、西方枢機卿様ご入場！」

謁見の間の前に着くと息つく暇もなく、すぐさま近衛兵が扉をあけて彼らを招き入れた。

謁見の間では国王が若い総帥の到着を待ちわびていた。

「来たか、頭を上げよ。形式ばったことは良い。報告が先だ」

国王は何やら鼻息荒げに身を乗り出してスイを近くに呼び寄せた。

「お前は良い。さがね。じじい」

一緒に国王に近寄ろうとした枢機卿は一喝されて壁際に下がる。その気まずそうな表情が可笑しくてスイは口角をつり上げた。

“ざまあみる”

したり顔のまま、国王の脇にまで歩み寄ると再び跪く。

それをみた王は玉座より腰をあげスイに近寄ると耳元に顔を寄せた。

「娘はやらぬ。汚らわしい異端者め」

囁いた国王の冷たい声にスイは硬直した。

“バレていた”

冷たい汗が体中から吹き出すような嫌な焦燥感が彼を支配する。

国王はスイの肩に手をのせ労うようにポンポンと何度か軽く叩くと、彼の周りをゆっくり歩いてから玉座に戻った。

「それはそれだ。ところで討伐はどうであったのだ」

「は……あの。いや」

上手く説明出来ない。恐怖と緊張がスイの体中の筋肉を震えさせている。

「なんだ。噂では魔女は姿を消したと聞いたが、倒せたのか？」

「いや。あの……」

言葉が出ない。

「ま……魔女の正体は、魔物ではありません……」

「言い訳か！ならば魔女はどうした」

「それは……」

国王はやや苛ついたようにスイの報告に言葉をかぶせてくる。

魔女に半殺しにされて命から逃げてきた。そんなことを言うような雰囲気ではない。にこやかに見える国王の瞳の奥に潜む冷たい刺すような殺気にスイは再び口を噤む。

「しかし、報告によれば聖者の白の娘を見つけ出したと聞いたぞ。家出中のランバート家の令嬢の保護にも成功したそうだな。ご苦労であった」

「へ？ランバート家？」

スイは何を言われているのかわからず間の抜けた返事を返す。

「竜使いの娘だ。搜索願いが出ていたのだ。ランバート氏も安心したであろう」

寝耳に水だった。

まさかあの礼儀も知らないような失礼な女がランバート家の令嬢だったなんて。例えば天地がひっくり返っても彼女が高貴な娘などとは想像もつかないだろう。

「わかった。魔女については魔物でないとのことであれば、別部隊に調べさせることにしよう。お前は引き続き討伐の指示を待つように。それまでは地方の魔物退治につとめよ」

「はっ」

幾分柔らかくなった国王の声にスイは胸をなで下ろす。

テスを保護したのも、変な女に付きまとわれたのも結果として全て良い方向に話がすすんだ。

ただひとつクレアのことを除いて。

スイは深々と国王に一礼した。そして下がるがろうと立ち上がった。

「サンマイン卿、今泉シン様、ご到着なさいました」

しかし、近衛兵が次の謁見者の名を高らかに唱えると、彼の血の気は一気にひいた。

謁見の間と廊下を仕切る扉が乾いた音を立てて開く。

現れたのは、女性と見紛うほど端正な顔立ちをした男。深い青緑色の瞳に短く整えられた茶金髪。その甘いマスクにはうつつすらと笑みか浮かんでいる。

服装は白地に青の装飾の入った軍服に白い表地に青い裏地のマントというスイとは全く逆の色調。その色彩は聖なるものを象徴する色だった。

「陛下、ご無沙汰しております」

男は軽やかに跪き国王に一礼する。

「よく来た」

国王はスイを目の前にした時とは比べものにならないほどの喜びを込めた声と満面の笑みで心から歓迎の意を示した。

「シン……」

今泉シン。今のスイにとって、この男の存在ほど不吉なものはない。スイの脳裏に苦い思い出がよぎる。

彼の思い人の心を次々と奪った親友、それがこの男、今泉シンなのだ。彼にとってそれは深いトラウマだった。

「スイ、お前は確か幼なじみであったな？」

「は……はあ」

王の問いにすらまともに答えられないほどの動揺と焦り。

「彼には姉のアンナ共々大変世話になりました。久しぶりだね、また会えて嬉しいよ、スイ」

「それは……」

スイは何か言いかけて口ごもる。

「クレアラは心を決めたようだ。こんやの宴で公表する」

“ ああ、やっぱりか ”

王の言葉を聞いたスイは納得させられた。それと同時に今までに

感じたことのないような怒りに体が震えた。

“ お前もかよ。 どうして俺じゃダメなんだよ ”

目の奥がじんわりと熱くなってくるのがわかる。そして喉の奥から何かグジグジとこみ上げる。

“ 吐きそうだ ”

スイは口元を覆った。

「今日ほめでたいことばかりだ。今夜の宴が楽しみよ」

「そうですね」

シンは柔らかく微笑む。

スイはその場で深くお辞儀をすると踵を返して足早に謁見の間を出た。

失礼は承知だったが、耐えられなかった。口の中がカラカラに渴いていて去り際の挨拶をしようにも声がでない。公人としては最悪のマナーだった。しかし、今の彼にはそんなことに構う余裕などない。

スイは去る前に思い出したように会釈をして謁見の間の扉を抜け

ると、それが閉まるのも待たずに駆け出した。
やがて中庭に面した回廊につくと息苦しそつに屈みこんだ。

「うつ、うおえっ」

吐き気に腹部が波打つように動くが、幾らえづいても何も出てこない。スイは回廊の壁にもたれて座り込んだ。

「なぜだ」

掠れた声は彼女を責める。

“彼女にちゃんと向き合つべきだった”

“もっと慎重に付き合つべきだった”

“不安にさせたりするんじゃないかった”

頭の中に浮かぶ後悔の言葉は彼自身を責める。

「クレア」

愛しい姫の愛称を唱えるように喚きながら彼はその場にずっと
いた。

親しき懐かしき敵（後書き）

ぐだぐだにお付き合いありがとうございます。

主人公が、オープンニングとちよっとイメージ違うよね。
作者もそう思う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2912t/>

青く染まる赤い月

2012年1月3日13時54分発行